トーコさんの騒霊な日々

氷桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トーコさんの騒霊な日々

【Ｎコード】

Ｎ４８６３Ｘ

【作者名】

氷桜

【あらすじ】

藤井陶子は新米刑事。近頃世間を騒がせている連続猟奇殺人事件の担当となって主人公の柏木天太と出会いＡＲＭＭＯＲＰＧにログインするサングラスを手に入れる。虚霊と戦いつつ主人公のダダ漏れするエロっぷりにもう一人のヒロイン珠璃と共に辟易したりする毎日。でも少しずつエロに染まりながら（注：主人公視点）事件の核心へ迫っていく。

それが始まり（前書き）

初めての方、はじめまして、氷桜（ヒオ）と申します。
色々と前小説から設定を流用してますが、全然違う話です。
今を逃すと小説中の季節とズレてしまうので、連載開始しておきます。
楽しんで頂けると幸いです。

それが始まり

都会の喧騒も、その路地にまでは届いていないようだ。
路地を南に通り抜ければオフィス街が、北に抜ければ最寄駅へと続く繁華街へ出られる。
昼間なら、サラリーマンやＯＬたちがひっきりなしに利用し賑わうこの路地も、深夜ともなればオフィス街からの人通りも途絶えネオンの明かりさえも照らさず、防犯対策などがポッカリと忘れ去られているかのような寂しい場所となってしまう。

けれど、その晩のこの静けさは普段に比べても異常だった。
まるで何者も寄せ付けない結界が周囲に張られているかのごとく。

閑静で昏いその場所で、うねうねと蠢く巨大な陰がある。
其れは大蛇だった。
三つの頭を持っていた。

毒々しい緑色が斑に輝く鱗を持ち、三頭それぞれの口からはチロチロと覗く赤い舌。
一つ目の口から吐き出される息には、時折炎が見え隠れしている。
二つ目の口から見える牙から垂れる液体は、地面にぶつかると『ジュッ』と音がした。
三つ目の口を開き、鮫のような鋸状の歯並びを見せ付け、如何にも凶悪で獰猛そうだった。

先ほどまで、この路地には人間が二人立って居た。
今では独りしか立って居ない。

もう一人は、いまや物言わぬ躯となってアスファルトに転がっていたから。

残された人物は、笑っていた。
まるで狂ったかのように。

誰も来ない暗い路地。
その耳障りな笑い声はいつまでも続いていた。
いつまでも、いつまでも……

大蛇はその笑い声に反応せず、ただ佇んでいた。

◆◆◆

「引退？」

その日、あたしは前々から考えていたＭＭＯＲＰＧの引退を、大好きだったそのヒトに伝えた。
「ええ、あたしもそろそろ大学入試を本気で考えないといけない時期だから」

「そっかぁ、せっかく知り合えたのにね」
あたしは、ゲーム内で知り合ったこの女性が好きだった。

チャットで、あたしは文字をキー入力してたが、このヒトはボイス・チャットを使ってた。

この声が大好きだった。
そのため、近頃では暇なときはこのヒトがいつも居る酒場でチャットして過してた。
「それなら、このＵＲＬアクセスしてみてよ。リアルでも遊べる面白いゲームが在るから」

そう言って、あたしに文字のような何かが描かれたカードを渡して来たので受け取る。
だから、なのかも知れない。このヒトに言われたのじゃなければ無視してただろう。
受験を控え勉強するためにネトゲを引退するのだから。

結局、紹介されたそのゲームに手を出してしまった。ｏｒｚ
他人に言われる前に自分で言うわよ、この廃人め、ってね。

こんなんで、あたしは志望する大学に合格出来るのだろうか？
まぁ、人生なるようにしかならないのよね。

「配送でーす」
「はーい！」

キタキタキターーッッ！！

あのヒトから教えてもらったゲームは、新しいタイプのオンラインゲームだとの振れ込みだ。
その運営サイトから購入したモノが今日ようやく家に届いたのよ。

初期投資で一万円が必要だというその新しいゲームは、運営サイトのＨＰを読んでも内容が全然伝わってこなかった。正直ホントに面白いのかは謎に包まれたままだ。
大好きだった彼女からの御推薦だったので騙されたつもりで高いお金を払う気になったのだ。
たかだか一万円とは言え、１７歳になったばかりの身の上には大金なのよっ。

包装を解いて箱を開けると現われたのは、真新しい綺麗なサングラス。
形状はいわゆるアラレちゃんタイプ。そういう形を選んだ。
あたしの視力は両目とも１．５なので、レンズに度は入ってない。
レンズの色は普通にグレー。綺麗に反射光を押さえた落ち着いた色をしている。

あたしはゲームでも何でも、マニュアルを読まずに始める人間である。
まずゲームを起動してあれこれ試しながら徐々に内容が判って行く過程が楽しいのだ。
ゲーム紹介のＨＰには、サングラスがネット端末として動作するゲームだと載っていた。
箱の中にいかにも分厚いマニュアルが入っていたが、とりあえずサングラスを掛けてみる……

ついさっきまで誰も居なかったあたしの部屋の中に、見たこと無い誰かがヌッと立っていた。

あたしの目の前、いわゆる恋人距離にその人物は立っている。

「うわぁっ　だ・だれぇっ！？」

あたしはビックリして思わずサングラスをその人物へ投げつけ……たが、目の前には誰も居なかった。投げたサングラスは部屋の反対側の壁にぶつかって床に落ちた。

「あ、あれぇ？　気のせい？」

キョロキョロしても部屋の中に誰かが居た形跡は無い。

当たり前だがこの部屋には瞬間的に隠れるような場所は無い。

玄関にはさっき宅配便を受け取った後に、しっかり鍵を掛けていたし。

サングラスは壁に当たった衝撃で壊れていた。

右のレンズがメガネのフレームから外れている。

「ああっ！！壊れちゃったよー　うぅ、高かったのにぃ……」

一万もしたのよっ！！　遊ぶ前に壊しちゃったじゃないのー　しょっくー

むー、誰も居ない部屋の真ん中で昼間から見知らぬ誰かの幻を見るなんて……

疲れてるのかな？

そう思いながら右レンズが外れて素通しとなったサングラスを手にとり、未練がましくフレームを眺める。壊れてしまったからと言ってこのまま捨てるのも惜しい。

悔しいからもう一度掛けてみた。

再びあたしの目の前に現われた謎の人物。今度はハッキリと目に

捉えられた。
左のレンズ越しはもちろん、素通しの右目でも消えずに見える……
銀の髪、青い目、真白い卵型の小さな顔、それはまるで氷で出来た魔性の人形。

「ぎゃぁぁぁあああああああああっっーーーーー！！」

今度こそ、あたしは悲鳴を上げた。
あたしの人生で初めて上げた本気の悲鳴だったと思う。

どれくらい時間が経っただろう？
「そろそろチュートリアルを初めても宜しいでしょうか？」
その声で我に返った。　ん？チュートリアル？

「……えっと、あんた、ゲームのキャラクター？　もしかしてこのサングラスの？」
そう言いながらサングラスを外すと、目の前の人物は見えなくなった。
もう一度掛けなおすと、また目の前に現われる。

……おっけー。
レンズの無い素通しな右目からでも見えるのは謎だけど、サングラスを掛けると見えるようになるのダケは判った。
目の前にスラッと立つ人物は、ゲームのキャラクターに相応しい物凄い美人さんだった。
服は古風な……なんというか、お色気たっぷりの《くのいち》風というか、そんな感じ。

「もうお分かりになりましたね？　そのサングラスはＡＲＭＭＯ形式のオンラインゲーム《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ　Ｏｎｌｉｎｅ》略してＵＧＯを遊ぶためのツールとなっています」
「ウゴ？　つか、そもそもゴーストなのにアンリアルってどうよ？」
「ＵＧＯのゴーストは大きく2種類存在します。貴女が《霊》と呼ぶ実在する霊魂と、サングラスを通した時だけ見ることが出来る《虚霊》と呼ばれる実際には存在しないけれど、ネットワーク上のＵＧＯ世界にだけ存在するヴァーチャルな霊魂です」
「この世に存在しない、虚霊？　……って霊って実在するんかい！？」

「はい、存在しますよ。そしてそれら2種類のゴースト達は普段は目に映りませんけれど、このサングラスを掛けることで見ることが出来ます。ＵＧＯはそう言った虚実の狭間に居る存在を操って戦うゲームなのです。リアルとバーチャルの狭間なのでアンリアルなのですよ」
「見えない者を見る……だから拡張現実ＡＲ（Ａｕｇｍｅｎｔｅｄ　Ｒｅａｌｉｔｙ）表示なのね……」

「御理解頂けたようですね。私は貴女が初期保有する《守護霊》と呼ばれる存在です」
「守護霊？」
「はい、名前は《ザ・シャペロン》と言います」

「それ名前と違うじゃん。職業？　名前はユーザーが付ける事が出来るの？」
「ええ、可能ですよ。名前をお付けになられますか？　では、どうぞおっしゃって？」
目の前の人物はそう言うと可愛らしく小首をかしげ、あたしの返

答を待つ。

「おっしゃって？妙な言葉使いのＮＰＣね、ふふ。　じゃぁ……《レイディ》で」

「承りました。　レイディです、幾久しく宜しくお願い申し上げますわ」

両手を前に、綺麗にお辞儀をする守護霊（レイディ）とあたしはこうして出会った。

「それでは最初に、貴女が受け取った『期間限定キャンペーン虚霊配布券』を使用して、虚霊を召還して頂けますか？」

「何それ？知らないよ？　サングラスの箱にはそんなの入って無かったよね？」

「そんなハズ無いですわ。貴女がこのＵＧＯを知るキッカケとなった人物から、贈り物として受け取っていたはずですよ、このくらいのカードです。思い出してくださいな」

あたしが知らないと言うと、レイディはちょっとあせった風に言葉を返す。

ＵＧＯを知ったキッカケの人物……ネトゲで知り合った彼女……《肉球ぷにぷに君》？

そう言えば、このゲームを紹介してもらった時、何かを渡されたような……

って、あれはネトゲの中での出来事だよ？

いや待てよ？　そういや、机の上に置いてあった謎のカードがあったような……

あれはどこにしまったっけ？
「これかっ！？」
なぜか捨てずに机の中へ放り込んでおいた変な記号が書かれたカード。

「ホッ、良かったです。ソレが無かったら何のために私が此処に居るのか、存在理由が無くなってしまいますから。ソレは通常のＵＧＯスターター・キットには含まれてはおりません。それを貰ったのは今のところ貴女だけなんですよ」
「……つーと、何かね？あんたはこの配布券に用事があってココに来たわけ？」

「はい、その券は貴女が《肉球ぷにぷに君》と呼んでる異世界神からの特別な贈り物。通常の虚霊とは異なる、特殊な虚霊を召還する神宝の一種です」
「……ハィ！？　ぷにぷに君が神？　アレが？」
あたしは、何いってんの？コイツ、と生暖かい目でレイディを見る。

「あの高貴なお方は、私が仕えるこのＵＧＯのシステム管理者《創生神シータ》様とは何かと衝突というか、お互いの業務妨害と言いますか、トムとジェリーみたいな悪戯をやり合う困った間柄のお方でして……」
高貴ぃ！？　ぷにぷに君がぁ？　あのはっちゃけたキャラクターからはとても縁遠い言葉の気がするけどなぁ。
「って、《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ　Ｏｎｌｉｎｅ》は神サマが運営してんの！？」

「はい、そうです。そして、あのお方から押し付けられた今回の厄介事がその券に封じられた虚霊なのです。私は貴女の守護霊である

と同時にその虚霊を監視する役目も仰せつかっています」
「はー、だからシャペロン（付き添い人・監視人の意味）なんだ？」
「そういう事です。もしその券が無かったなら、私じゃない他の誰かが貴女の守護霊となっていたことでしょう」
「あたしも、どうせ守護霊となってもらうなら貴女で良かったわ。ラッキーね」
そういうと、レイディは薄く微笑んだ。

「んで、どうやってこの券を使えばイイのさ？」
「手に持って念じれば良いのですよ」
こうかな？

「……なにも起きないよ？？　なにか変わった？？」
「……なるほど。これはまた厄介な虚霊ですこと……　では、鏡を御覧になって？」
鏡？
あたしは姿見に自分の全身が映るよう移動する。
それを、目にしたとたん、

「うっ……ぎゃぁぁぁあああああああああっっーーーーー！！」

今度こそ、あたしは失神した。
薄れ行く意識で幽かに思った。
オトメに、これは無いヨ

……

b
l
a
c
k

o
u
t

……

それが始まり（後書き）

たしかに設定は流用したけれど、眼鏡ネタまで一緒だったとは書き終わってから気付いたよ。
どんだけメガネ好きなんだ？わたしゃ。

自分は小説の修行のために投稿しているのではなく、好きなものを書く、というのが原動力です。
そのため、ストーリーを批判されても直す予定も無く行き場がありませんので、スルーして頂くのがお互い楽な道だと最初に申し上げておきます。

その2（※ただし後に修正可能性大）（前書き）

つたない文章でも、お気に入り登録してくださった方、ありがとうございます。

この回のお話は2章のプロローグとも言える物です。
（そして2章はまだ書き進めてません）
なので、2章の展開次第では予告無く大幅に変更される可能性があります。

そのことをご了承の上、お読みくださるよう願います。

その2（※ただし後に修正可能性大）

「天太！」

俺が学校帰りに、とある事情で池袋をブラついてると後ろから声が掛かる。

この声は……

「よぉ！信之。学校こねーと思ったらこんなトコに居たのか？」

振り向くと、そいつは俺のクラスメートで割と仲が良かった新谷信之だった。

んなっ！？　なにぃ　オンナ連れ……だと！？

信之ってヤツは、クラスの中じゃ大人しい方で最近は学校を休みがちだった。

なのにオンナ連れとは……なんか、いきなりキャラが変わってんですけど？

「天太は相変わらずナンパか？　そろそろ一人に決めた方が楽しいセイシュン送れるぞ」

信之が連れてる派手なオンナ二人は（ふざけんな！）、その辺に居そうなフツ顔だったが、二人とも、信之に腕を絡めて両手に花状態だ。

な～にが一人に決めた方が、だ。

オメーが言うな。

「ノブユキ君、この子、お友達？　紹介してよ」

「ああ、こいつは同級の天太ってヤツでさ、見ての通りエロ小僧だ

よ」
「やっだぁ、エロ小僧なのぉ？　もしかして童貞君？」
「おい、喧嘩売ってんのか！？　#」
「へへ、わりぃ、悪気はねぇんだよ。カンベンしてやってくれ」
なんなんだ？　モテ期に入って有頂天なのは判るけどさぁ、礼儀ってモンがあるだろ？
ムカっ腹を立てるが、お一人様の逆切れとか思われるのもうっとうしい。
少し頭を冷やして、失礼な女ドモを見ると……
なんだぁ？　この女ドモ、二人とも背後に変な霊が憑いてんですけど？
うっわ、目を合わせると祟られそう。やっべぇ。
その変な背後霊はどちらも地味な女で、チラと見た限りじゃ、憑いてる女ドモにそれぞれがどこか似ていた。この失礼な女ドモの御先祖サマの霊だろうか？
黒髪でヤボったく、眉毛も整えておらず、化粧ッケは全くないのか肌もくすんだ感じだ。
憑かれてる方の女ドモがきれいに眉毛を整え、茶髪でバッチリ厚化粧決めてるのと対照的。
「ねぇ、天太君。　天太君も暇ならあたし達が遊んでるネトゲで一緒に遊ばない？」
も、ってなんだよ、俺は暇じゃねぇーよ！！
「おーそうだ。天太、俺らＶＲＭＭＯＲＰＧってので遊んでんだよ、ＶＲＭＭＯって知ってっか？バーチャル・リアリティーのＶＲで《

Ｔｒｕｅ　Ｌｉｆｅ　Ｓｔｏｒｙ》つーの。　すっげぇ面白えんだぜ？
こいつらとはそれで知り合ってよ。同じパーティー組んで遊んでんだよ」

「ＶＲＭＭＯ？　おいおい２１世紀とは言え、車もまだ飛んでない世の中でＶＲは無いだろ」
ＶＲ技術なんて小説の上だけだろーが！！　ナニ言ってんだ？こいつら。
そこまで言って思い出した、そういや俺が今も顔に掛けてるサングラスも世の中の技術から一歩飛び出たシロモノだって事に。そう考えりゃＶＲもアリなのか？

「やっだぁ、天太君って遅れてるぅ」
「ありえなーい、イマドキＶＲＭＭＯしてないなんて」
「おいおい天太ぁ、おまえやっべぇぞ？　ニッポン人として世の中の話題に乗り遅れてっぞ？」
「そこまで言うか！？　だいたい２０１１年の現代にＶＲ技術なんてねーだろーが　＃」

「天太ぁ、おまたせ……あれ？お友達？」
おっと、珠璃が戻って来た。

「あ、クソなんだよ、つれねぇ態度だと思ったら、俺サマは美少女連れてますカラってか？」
「あ゛？　信之、オマエ失礼じゃねぇか？　そもそも最初に女自慢して来たのソッチだろ？」
「な、なに？　どったの？天太」

珠璃がイキナリの喧嘩に戸惑ってる。

「いこ、ノブユキ君。　青い目のガイジン女連れてキモぃっつーの」
「ほんと、ＶＲＭＭＯも知らない時代遅れヤロウなんてほっとこうよ」
「喧嘩売るなら買うわよ？　＃」
女ドモのあまりの無礼さに珠璃もキレた。

珠璃は赤毛の金髪で青い目、米国生まれだ。
アメリカン・ビューティーをスレンダーにして幼くした感じの白人美少女。
生まれて間もなく日本に移住し、今ではネイティブな日本人っつっても良い。
それでも時々こんな風にガイジンって意味も無く排斥しようとするヤツラが居る。

俺とはＡＲＭＭＯＲＰＧの《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ　Ｏｎｌｉｎｅ》ってゲームで知り合って、たまにこうして会ってゲームしてる仲で、同い年の１７歳。
俺が普通の公立校なのに対して、珠璃は進学校に通っている。
《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ　Ｏｎｌｉｎｅ》がなきゃ、きっと知り合うことなんか無かっただろう。

信之と女ドモは言うだけいうと、さっさと行ってしまった。
「ナニよ、アレ？　天太？」
「あんなヤツだったかなぁ？　すまん珠璃、あいつ、モテ期でチョーシこいてるみたいだ」

「まぁ、イイケド。　それよりさっきの女達の背後に居た《霊》見た？」

「あぁ、なんか祟られそうな地味ッ娘だったよな」
「ん～、なんかさぁ、口が『たすけて』って動いてたような気がするんだよね……」

俺は肩をすぼめ、
「まぁ、なんでもイイサ。救いを求めてる《霊》を全部助けてるほど暇じゃねーし」
「そうだね……そういや、なんでアイツら、あたしの目が青いって解ったんだろ？　今はサングラスを掛けてるから、瞳の色は見えないハズなのに」

俺も珠璃も《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ　Ｏｎｌｉｎｅ》にアクセスするためのサングラスを掛けてる。
だけど、それは、

「ん？知らなかったのか？　サングラスは《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ　Ｏｎｌｉｎｅ》プレイヤーじゃないと見えないんだぞ？　赤の他人からは俺たちの素顔が見えてるらしいぜ？　前に試したところじゃ、貸すとサングラスは見えるみたいだけど、ＵＧＯにはログイン出来ないし、霊も見えないらしい」
「えーっ！？　そうだったの？　このサングラスって不思議なオーパーツだね」
「オーパーツって、その言葉はどっちかって言うとオーバーテクノロジーが相応しくね？」

俺と珠璃は意識して不愉快な話題から離れ、共通の話題で盛り上がった。
さってと、今日は何処のダンジョンで狩ろうかな。
俺の頭の中からは、さっきの無礼な女ドモのことはキレイサッパリどっかに行ってた。

ＶＲＭＭＯ《Ｔｒｕｅ　Ｌｉｆｅ　Ｓｔｏｒｙ》が、やがて俺タチに関わってくるとはこの時まだ知らなかった。
このとき既に、悪意は深く、広く根を拡げていた。
やがて芽吹いて、俺たちがそれと気付くまでは、まだ半年以上も先の話となる。

◆◆◆

ちっ、なんだよ、天太のヤツ。
あんな美少女連れてさ、今まで隠してたのか？　くそ自慢かよ！？　ムカつくぜ！！

「ノブユキ君、早くホテル行こうよ」
「そうだよぉ、ガイジン女なんか忘れちゃうくらいシボってあ・げ・る」
「お、おぅ。へへ　今日もヒーヒー言わせちゃうぜ？　しおり、それに晴美ぃ」

この二人とはＶＲＭＭＯの《Ｔｒｕｅ　Ｌｉｆｅ　Ｓｔｏｒｙ》で知り合い、オフライン・ミーティング、いわゆるオフ会ってヤツで出会ったその日に、リアルでも俺の女になった。
俺はフツメンだし、運動も勉強も下から数えた方が早い。ま、それは天太も一緒だが。
年齢＝彼女居ない暦だった。

学校行くのもかったるくて引き篭ってた時に、ネットで《Ｔｒｕｅ Ｌｉｆｅ Ｓｔｏｒｙ》を知った。
速攻で《Ｔｒｕｅ Ｌｉｆｅ Ｓｔｏｒｙ》のアカウントを取得してクライアントをダウンロード。
即座にインストールし、《ドッペル》と呼ばれるアバターを創ってゲームにログインした。

ゲーム世界はまさに夢の世界だったよ。
そこでは、俺は美少年のヒューマンで、何でも出来た。
開始して直ぐに種族サキュバスでログインしていた彼女達と知り合ったんだ。
それ以来、ゲームの中でもリアルでも、俺の女としてずっと隣に居てくれた。

天太と路上でもめてから早いもので、はや数ヶ月が経った。
俺はもう学校も退学し、毎日《Ｔｒｕｅ Ｌｉｆｅ Ｓｔｏｒｙ》で遊ぶか、彼女達とシッポリするかのどっちかの生活を繰り返していた。

俺の《ドッペル》もレベル９９。
今日、ようやくレベル１００に到達して《転生》イベントをやる予定だ。
今はこの《Ｔｒｕｅ Ｌｉｆｅ Ｓｔｏｒｙ》世界の神である《ムマジン》に会いに来たところさ。

『ノヴァ・スノーよ、オマエは転生し、この先も我に仕えることに依存は無いな？』

ノヴァ・スノーってのは俺の《ドッペル》の名前。ネーミングにヒネリは無い。

ノブユキから取ったって解る人間にはすぐ判る。

《ムマジン》からの転生の問いかけで、目の前にＹｅｓ／Ｎｏのダイアログが表示される。

もちろん、Ｙｅｓで回答する。

『ならばノヴァ・スノーよ、これより永劫に続く恥辱と苦しみの中で、我に力を与え続けよ』

へ？　永劫の恥辱と苦しみって……

う、うぉぉぉおお？　なんだ？　目がグルグル回る……く、苦しい……

俺は全身を蝕む痛みの中で目を覚ました。

い、いてぇ。　そして目が見えない！！　真っ暗だ。

いったい、何がどうなったんだ！？

この状況、こ・これはもしかして、小説なんかでよく見かける遊んでたＶＲＭＭＯ世界への転生とかいう状況じゃね？　お、俺、もしかして異世界へ来たんじゃ？

んじゃぁ、ここは《Ｔｒｕｅ　Ｌｉｆｅ　Ｓｔｏｒｙ》の世界かよ？

こんな暗い場所あったっけ？

ん？　向こうの方にかすかに明るい場所が……人？人が居る……
そう気付いたとたん、俺はその場所に立っていた。
ちがう、俺の身体は透き通っていて、まるで幽霊のようだ。なんだこりゃ！？

そして、俺の目の前には『俺』が居る……

「新谷信之よ、お前は今日からこの《聖幸福教会》の信者として、お布施集めをするのだ」
「ハイ、教祖サマ。　手始めにこの身体の親から、財産を全て寄付させるよう働きかけます」
「ウム、働きかけるではない、毟り取れ。金が無くなったら臓器を売れ」
「ハイ、教祖サマ」
「下がってよし」
「ハイ、教祖サマ」

な、なんだ？　ナゼ俺の身体がそこに居て、この変なオッサンにヘコヘコしてるんだ？
教祖だってぇ？

「っくっくっく。　ＶＲＭＭＯＲＰＧ《Ｔｒｕｅ　Ｌｉｆｅ　Ｓｔｏｒｙ》ママサマだ。男は臓器を売らせて、女には身体を売らせる。まさに金の成る木よ」
『汝には我がついておる。我にさらなる贄を寄越せ、さればこの世におそるるモノ無し』

あれは《ムマジン》！！
「おお！我が神（ムマジン）サマ。今日もまた一人、ドッペルゲンガーと魂が入

れ替わった小僧が此処に来ましたぞ」
『知っておる、今も其処に居て会話を聞いておる』
「おお、おお、さようですか。　っくっくっく、聞いておろう新谷信之君。見ての通りキミの身体は我々が譲り受けた。キミはもう生涯身体に戻ることは出来ないし、君の身体も遠からず臓器を売って死ぬだろう。だから苦しみは短くて済むぞ。ニートで社会の屑をリサイクルして世の中の役に立ててやろうと言うのだ、我々に感謝したまえよ」
『ノヴァ・スノー、ノブユキよ。死してもお前には安らぎは訪れない。永劫に我の飴玉としてお前の苦しみを我に味あわせ続けよ。それが我の力の源となる』
「っくっくっく。素晴らしい。屑なりに《ムマジン》サマへ貢献出来るとは！」
ふ、ふざけるな、返せよ！！俺の身体！！
「信之君、キミは転生イベントで《ムマジン》サマに忠誠を誓うことを承諾していることは忘れて居ないだろうね？　キミの承諾した旨は、我が《聖幸福教会》のサーバー上にログとして残っておる。つまり、キミは我が教会に入信したことになっているのだよ」
な、なんだよ、そんなのしらねーよ！！
「だからなんだ？と思っているかね？　入信した事実があれば《信教の自由》というヤツよ。警察が絡んできても、キミ自身の意思でここに居るんだ、と言い張れるのだよ」
俺が教祖とやらに殴りかかろうとすると、とてつもない痛みが全

身を襲ってきた。

ぐぁぁぁぁぁぁぁ、なんだよ、これ。

痛くて動けねぇよ……

「いまキミの身体を動かして居るのは、キミ自身の手でレベル１００まで育てた《ドッペルゲンガー》だよ、キミの行動、キミの話し方を数ヶ月掛けて学習し、そしてキミの魂と入れ替わった。身体を乗っ取るための悪魔を自分自身で育てたのだ、愉快痛快とはこのことじゃないかね？」

「「教祖サマ」」

し、しおり、それに晴美じゃねーか！？

しおり、晴美ぃ～　助けてくれよ～！！　なんとかしてくれー！！

「来たか。お前達は今日からまた新しくキャラを作り直し、さらなる贄を連れて来るのだ」

「「ハイ、教祖サマ」」

「ウム、で、どうだった？　信之とかいう小僧は」

「ハイ、最低でした。もう二度と抱かれたくありません」

し、しおり……

「テク無し、早いし淡白。死ねばいいのに」

晴美、お・おまえ……

『恨むが良い、お前を騙し、地獄に叩き込んだ女を。悔やむが良い、己の運命を。嘆くが良い、永劫に救われぬ己の魂を』

なんで、なんで、俺がこんな目に……

『美味、お前の魂が磨耗し消滅するその日まで、我に力を与え続けよ』

その2（※ただし後に修正可能性大）（後書き）

自分は小説の修行のために投稿しているのではなく、好きなものを書く、というのが原動力です。
そのため、ストーリーを批判されても直す予定も無く行き場がありませんので、スルーして頂くのがお互い楽な道だと申し上げておきます。

トーコさんと連続猟奇殺人事件？（前書き）

１話⇒２話⇒３話……と昇順に書き進めるのが苦手です。
１話書いては５話目を書いてから４話目を……と書きたいお話からランダムに書くスタイルの方が、わたしには合ってるようです。

何が言いたいかと言うと、所々お話が虫食いで「これから書くわ」という話数がありますので、そういう所は投稿に時間が掛かったりしちゃったり。ということで一つヨロシク。

トーコさんと連続猟奇殺人事件？

藤井陶子（ふじい・とうこ）警部補は、大学卒業後の新人研修を経て警視庁刑事部へ着任したばかりの新米刑事である。いわゆるキャリアと呼ばれるエリートだが、現場叩き上げの古参刑事達から見ればまだまだヒヨッコの見習いであることは間違いない。

着任してようやく半年が経ち、刑事と言う職業に慣れて来た頃に、藤井陶子は近頃世間を騒がせてる連続猟奇殺人事件の捜査本部付けとなった。

その事件は、これまでに6件発生し、同数の惨殺死体が都内各所から発見されていた。

今のところ発見された場所および時間、被害者の関連性は全く掴めて居らず、通り魔的犯行と見られている。殺害時刻はいずれも深夜から早朝にかけて行われていた。

しかし、通り魔にしてはその殺害方法が尋常ではなかった。

被害者は大型の獣に噛み殺されており、性別すら判別出来ないほど損傷していたからだ。

6件全て同じ状況だった。

警察では、都内動物園の猛獣や、違法輸入でもたらされた大型獣が逃げ出したのでは？との見解で捜査を展開していたが、これまでのところ有力な情報はもたらされていない。

人を噛み殺せるほどの大型の猛獣にしては、それらしい目撃情報が皆無であり、それほどの凶暴な猛獣の移動には人間が関与している可能性も挙げられているが、非常線による車両検査でも発見に至

って居ない。

そんなある日、出勤した陶子は同じ事件に関わっている先輩刑事が朝からサングラスを掛けていることに気付いた、映画マトリックスの主人公のような形状だ。

「センパイ、おはようございます。朝からオシャレですね」

縦社会の警察組織において、陶子は警部補とはいえ見習い期間中の身である。

先輩をたてた呼び方を行うのは、人間関係の軋轢を配慮した当然の知恵だ。

「おう、藤井か、おはよう」

「雰囲気変わりますね、そのサングラスを掛けたセンパイは」

「はっはー、似合うか？　これで我が刑事部の愛すべきメガネちゃんこと藤井とお揃いだな」

「あたしのメガネもファッションではありますけど、さすがにサングラスは行き過ぎだとボスに怒られませんか？」

「藤井のその服装ほどじゃねーだろ……、それに誰もこのサングラスには気付いてくれねーんだ、藤井だけだぜ？褒めてくれたのはよ」

「お言葉ですがセンパイ。この服装は見た目の『御堅さ』より『気安さ』を優先した結果です。パンツスーツの女刑事なんて典型的スタイルでは、ただでさえ市民と直に接しなきゃならない刑事職なのに、敬遠されてしまっては業務の効率が上がりませんよ？」

陶子の格好はフェミニンなブラウスとスカート姿だ。

もっとも指摘されているのは海外ブランドのオーダーメイドによるお値段の方なのだが。

「それで、どうした心境の変化ですか？　そのサングラス」
「コイツはな、夕べ２３時頃に路上で挙動不審な男にバンかけ（注：職務質問のこと）した時に、そいつはどうやら直前に喧嘩して軽い怪我してたみたいだが、怪我の程度も軽いし、任意同行するほどでも無いと判断したんだ。そしたらコイツを要らないからって俺に放り投げて寄越してさ」

「素敵なサングラスですね。　でも職質した相手から物を受け取って、さらにそれを私用で使っても大丈夫なんですか？　普通、警官に不要だからって物を渡さないでしょう？」
「おいおい、賄賂とか脅迫罪を心配してんのか？　今回は相手がコイツをもう持って居たくねぇ、一秒でも早く手放したいってぇから受け取ったんだぜ？　問題はコイツが唯のサングラスじゃ無かった。って処なんだけどな」

「貰ったんだからタダじゃないですか、それとも、どこかのブランド物なんですか？」
「かぁーカッテェ、藤井カッテェよ。さっきからコッチコチで委員長サマのようだぜ？　しかも、そこはかとない険を感じるのは俺の気のせいですかぁ？　その服装の様に柔らかくしてくれよ」

「それは失礼しました、他意は無いのですが。それよりも唯のサングラスじゃない、とはどのような意味でしょう？」
「あー、それなんだがな。　お前、このサングラスを掛けて何か見えるか？」

サングラスを渡してくるので、陶子はそれを受け取って顔に掛け、そして言った。
「なんてこと無い普通のサングラスですね。　何か見えるかと言われれば、普通に物は見えるのですけど？」
「だーよなー、他のヤツラにも確認したんだが、それ掛けて変な物が見えるのはどうやら俺だけらしいなぁ」

陶子はサングラスをセンパイに返すと、
「変な物ですか？　例えばどんな？」
「あー、いや、いい。気が狂ったとか思われるしな。忘れてくれ」

陶子が軽く小首をかしげると、
「それはともかく、藤井は今日も可愛いねぇ、今晩一緒に飲みに行かねぇ？」

「お断りします。それよりミーティングの開始時間１０分前ですよ」
「速斬りかよっ。　ん～じゃ今日も頑張りますか」

捜査に進展は無く二週間後、その先輩刑事から陶子は、とある業務協力を依頼された。
「藤井、ネット使ってＰＫクラン《ビシャス・クロス：Ｖｉｃｉｏｕｓ　Ｃｒｏｓｓ》とか言うのを探してくれないか。『悪意の十字架』とかいう意味だな。ネットに載ってるとは思えねぇが念のためだ」
「……はい。確認ですが、ＰＫって何かの略称ですか？」
「プレイヤー・キルとかプレイヤー・キラーとかっての頭文字だな。

オンライン・ネットワークゲーム、それも対戦ゲームなんかで使われてる言葉だ」

「そのＰＫクランのビシャなんとかってのが今回のヤマに絡んでいるのですか？」

「《ビシャス・クロス》だ。まだ判らん。　ただ被害者の一人と交際していたって人物からの話では、ガイシャがそのＰＫクランメンバーの《レイディ》って人物とトラブルを起こしたコトがあったらしい。何でもゲーム中に一方的に殺されたとかで、仕返ししてやるとか息巻いてたようだ」

「対戦ゲームでやられたからって、仕返ししてやるですか？　ずいぶん幼稚ですね」

陶子が呆れた顔していると、

「冷静に考えるとそうだけどな。ＰＫされる側からすると迷惑行為なんだろ」

「そのＰＫクランですが、ネットワークゲームなら運営団体に事情を話して情報提供を受けるわけには行かないのですか？」

「ああ、そのネットワークは通常のインターネットとは異なるようで、運営団体を探ろうにもネットそのものが不明っつー、やっかいな代物なんだ」

「アクセスポイントとか、サーバーのログから追いかけられないのですか？」

「インターネットじゃねぇし、無線通信だと思われるが電波の送受信もされてねぇことはサイバー犯罪対策課に確認したしな。つまりどうやってアクセスしてるのかも判らねぇってことだ」

「なんですか？　それパソコンの話じゃないんですか？」

「このサングラスだよ。信じられっか？　このサングラスにはパソコン並みのハイビジョンで高精細画面が今も表示されてて、それが俺にしか見えねぇってことによ」
「つまり、そのサングラスはネットワークの端末なのですか？　なのに通信のための電波がなんらかの隠蔽技術を使われていて検出できないと？」

「そういうこった。エックス線でサングラス内部を確認しても、普通のサングラスにしか見えねぇとよ。レンズも普通のプラスチックレンズで表示機の機能なんて欠片もねぇそうだし、通信するためのチップも何もかも存在してねぇと来たもんだ」
「センパイ、通信チップも無いし液晶でも無いし電波も発信されてないのに、通信端末だとか高画質な画面だとか、おまけにセンパイにしかそれが見えないって、それ何かの冗談ですか？」

「言われると思った。ウソじゃねーんだがなぁ……　とにかく調査頼んだぞ」

◆◆◆

「ケイジサン、情報料代ワリニ、アクセサリー買ッテッテヨ」
「ちっ、その代わり、次はもう少しマシなネタ頼むぜ？」

俺は夜の新宿裏通りで、なじみの情報屋から事件に関係しそうな目撃情報の聞き込みを行い、アラブ系外国人であるそいつが開いて

いるアクセサリー露店から目に付いた指輪を買ってやった。
これも付き合いだわな。
赤い小さな石が付いたその指輪を手でもてあそびながら、
「やる相手なんざイネーっての」
独りごちる。
思い浮かべるのは、綺麗な顔した後輩刑事の笑顔……
やれやれ。
最近の俺は、ちと焦りが出てきてるなと、自分で自覚していた。
「ま、俺はしがないヒラ刑事、向こうはキャリアの警部補サマだしな」
わずかの間に、彼女は警部、そして警視へと出世街道を駆け上がって行くのだろう。
そうして、俺のことなんざ直ぐにでも忘れちまうに違いない。
その時が来ることを考えると、妙に悔しいし、寂しい。
ヒラ刑事の悪あがきといやそれまでだが、このサングラスに映る不思議な光景とそこから得られる情報を元手に、少しでも功を立てようと足掻いている。才媛の彼女からすりゃ俺なんざ、さぞ滑稽な小物だろうよ。
誰も信じちゃくれないが、この不思議なサングラスの特異性から、神出鬼没の犯人に迫れる気がするんだ。刑事のカンってやつさ。
被害者の一人がノートに書き残していた内容から、被害者が遊んでいたゲームが《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ　Ｏｎｌｉｎｅ》なのだと、このサングラスを持つ俺にだけは直ぐ判った。
サングラスを貰って最初に掛けたその時に、俺の目の前へと突然

現われた《守護霊》とか言うヤツから色々教わりながら二週間。最初レベル1だった《守護霊》も今ではレベル7まで育った。
そういったゲーム初心者へ教えてくれるイロハを、チュートリアルとか言うらしい。

俺は、最近の恒例行事と化してる《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ　Ｏｎｌｉｎｅ》のチャット・ウィンドウを開いて、そこを流れる真夜中の噂話ってヤツをチェックしだした。

トーコさんと連続猟奇殺人事件？（後書き）

自分は小説の修行のために投稿しているのではなく、好きなものを書く、というのが原動力です。
そのため、ストーリーを批判されても直す予定も無く行き場がありませんので、スルーして頂くのがお互い楽な道だと申し上げておきます。

トーコさんと連続猟奇殺人事件？（前書き）

リアル事情で午前様になってしまい、チェック不十分だった場合には近く修正する可能性がある……かも？

とはいえ、お楽しみ頂けたら幸いです。

トーコさんと連続猟奇殺人事件？

『こちらゲーム初心者のＬｖ５です。ＰＫとかしないで一緒に遊んでくれる優しいＬｖ６－７辺りのヒトを新宿で募集してます』

サングラスに映る《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ　Ｏｎｌｉｎｅ》の、チャットウィンドウを流れる様々なプレイヤーの投稿メッセージを眺めていたら、ふと、その一文が目に止まった。

このゲーム、リアルを題材にして、かつ、倫理規制何ソレ？と思えるような気持ち悪い、ハッキリ言えばゲロいネタが満載している。エロじゃねぇゲロだ。絶対Ｒ－２０だ。

まともな神経の持ち主なら、夜中に一人でトイレにも行けなくなりそうなゲームだ。

いや、そもそもこのゲームを気味悪がらずに独りで遊ぼうとする初心者なんぞ居るか？

初心者ならＰＫよりも、このゲームに登場する諸々のゴーストの方が怖いだろうに。

一緒に遊んでくれるだけで、相手が誰だろうと地獄に仏って思えるぜ。

そんなゲロゲーで、初心者なのに、ＰＫを気にしつつ、優しいヒト募集だと？

何気ないメッセージに込められた３つのキーワード。

２つまでなら違和感が無かっただろう。

だが、３つ揃うと刑事のカンに触れた。

こいつ、ホントに初心者か？

俺は《ウィスパー》と呼ばれる機能で、メッセージを投稿した人物に話し掛けた。

このサングラスは携帯並みの通話機能すら持ってる。まったく不思議な品だよ。

「こちらＬｖ７です。いま新宿に居るんで少しだけですが一緒に遊びませんか？」

「どもども。こっち歌舞伎町の二丁目に居るんですけど？」

「了解、そっち行きます」

妙に甲高いそいつの声は、女なのか男なのか判別出来なかった。

こいつがホントに初心者ならただの無駄足で終わる。

そん時は、ちょっと遊んでバイバイすれば良い。

だが、初心者を装ったヤツだったら？　何のためにそんなことをしている？

俺は自分のカンを信じて歌舞伎町へと足を向けた。

指定された場所に少し遅れて現われたのは、身長は約１７０ｃｍより少し高いくらいだろう、大柄で小太りな女だった。

金髪ロンゲだがアレはカツラか？　すこし遠目でも刑事の観察眼なめんなっ。

顔は《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ　Ｏｎｌｉｎｅ》のサングラスを掛けてるのと、両頬を隠すような髪型のせいで、どんな顔をしているのか、そして年齢までは解らない。

スカートをはいているが、服装はセンスの悪さを感じた。

ちょっと見た限りでは女に思えたが、もしかしたら女装という可能性もあるか。

ソイツはニヤニヤと薄気味悪い笑いを口元に浮かべつつ、そこに現われてから一向に何も話そうとしない。なんだコイツ？

「おい」

痺れを切らした俺がそう話しかけた、まさにその時、

『『『　ブォーン　』』』

辺りに響き渡る重い効果音と共に、地面に現われる紫に耀く不思議な形の模様。

なんだ、ありゃ？　魔法陣！？

「ひゃーーーーっっはっはっはー、ブァアーカ、引っ掛かったな！！」

そいつは、狂ったように笑いだした。

気に障る笑い声に気を取られた瞬間、魔法陣らしき物から何かが飛び出して来る。

鮫のような尖った乱杭歯をむき出しにした大蛇らしき生物が大口を開け、俺の《守護霊》を飲み込もうとしている。あまりにも素早いその動きは、人間の反射神経を大きく上回ってた。

あ、っと思った時には、《守護霊》の上半身は既に怪物の口の中だった。

俺は熱いような痛みを腹に感じた。噛み付かれたのか？？

俺の《守護霊》は怪物の、たったの一撃でＨＰをゼロにされてポリゴンを爆散させ《死亡状態》となってしまった。

怪物の強力な攻撃力は《守護霊》のＨＰを大きく越えゼロにした

だけでは飽き足らず、操るプレイヤーである俺自身にもダメージが還元されたようだ。
ダメージ・フィードバック・システム。
通称【霊障：バックラッシュ】と呼ばれる《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ　Ｏｎｌｉｎｅ》特有の現象だ。

あまりの痛みに俺の身体は麻痺したように動けない。
化け物め！

その化け物は《守護霊》だけでは物足りなかったようだ。
俺へと顔を向けた直後、ヘビのように一瞬で飛び掛って来た……
俺が視認出来たのは、上あごと下あごにビッシリと生え揃ったカミソリのような歯。
やっぱりこの化け物は大蛇の一種のようだ。

麻痺したまま動けない俺は、何も出来ないまま丸呑みされ、蠕動運動でさらに腹の奥へと運ばれるのを感じた。
大蛇の腹の闇の中、何も見えない。
俺が最後に思い浮かべたのは……

さっき買ったばかりの赤い石が付いた指輪と、その指輪を嬉しそうに受け取り、耀かんばかりの微笑みを浮かべた後輩の顔だった。
「フジ……イ……」

「センパイが……亡くなった？」
陶子は、捜査一課長からもたらされた話に瞳を大きく見開いて驚

いた。
「ああ、今朝０３：４０頃に歌舞伎町二丁目のビルの間で見つかった。奴さんが７人目のガイシャになっちまうとはな、参ったよ。藤井、おめぇ最近ヤツが何を張ってたか知らねぇか？」

陶子は顔をうつむけて、一瞬間をおくと、
「申し訳ありませんが聞いていません。ただセンパイは最近何か悩みでも抱えていたのではないでしょうか？　サングラスを掛けると他のヒトには見えない変な物が見える、とか言っておられましたから」
「ああ、それは俺も知ってる。　俺がそのサングラスを借りて掛けた時にゃ、変なモノなんざ何も見えなかったよ。　なのに奴さんは幽霊が見えるって大騒ぎしてたな。　ふー、そうか藤井も何も聞いてねーか」

「それでセンパイの御遺体は？」
「今は司法解剖に出されてる。葬式はたぶん来月になるだろうが、そんときゃお前さんも出てやってくれ。　奴さん、お前さんを好きだったみたいだからな、供養になるだろ」
「それは……はい、もちろんお葬式には出席するつもりです」
「あー、お前さんも気付いてたか。本人は気付かれて無いと思ってたらしいがな」

「はい……。それでは他に何か思い出しましたら報告いたします」
「ああ、そうしてくれ。邪魔したな、仕事に戻って良いぞ。　ああ、それと、パートナー決めるまではしばらく独りで活動しててくれ。それとこの件はマスコミには調査中でノーコメントだ」
「了解しました」

陶子は自分の机に戻ると引き出しを開き、中からメモの切れ端を取り出す。

『藤井、この不思議なサングラスの事を聞いて笑わなかったのはお前だけだ。だからお前にだけは、この件で俺に何かあった時には捜査を引き継げるよう連絡先を残す。警部や他の奴等は信じちゃくれないしな。詳しいことは其処に書かれているソイツから話を聞いてくれ』

「センパイ……必ず、犯人には相応しい罪の償いを受けさせますね」

おー？　藤井ーぃ？

陶子は、脳裏に浮かんだ故人が自分を呼ぶ声と笑顔を思い出し、少しだけ寂しそうに微笑んでから、仕事の顔に戻すと、

「柏木天太（かしわぎ・てんた）、か……」

陶子はもう一度目を閉じ、去来する想いにしばし身を任せてから、書かれている連絡先と名前を再度確かめ、電話を掛けるべく受話器を持ち上げた。

トーコさんと連続猟奇殺人事件？（後書き）

うぅ、連続投稿出来ないかも？と言ったとたんにリアルで急用が……
次話、ようやく主人公のターンなのに。
Ｒ－１５表現で不適切な箇所がないか、もう少し確認したいので一週間ほどお時間頂きたいです。

そして、ごめんセンパイ、貴方の名前は出てこないのだよ。

自分は小説の修行のために投稿しているのではなく、好きなものを書く、というのが原動力です。
そのため、ストーリーを批判されても直す予定も無く行き場がありませんので、スルーして頂くのがお互い楽な道だと申し上げておきます。

トーコさん天太と出逢う？（前書き）

Ｒ－１５表現どうしようか？悩んだ末に←←←こうします。

※盗撮は犯罪です、決して真似をしないでください。

良い子のみんなは、やっちゃダメだよ。

トーコさん天太と出逢う？

「死んだって！？」
ゲームで知り合った刑事さんが亡くなったことを、俺はＴＶのニュースで知った。

現役の警察官が捜査中に亡くなったことで、ニュースでは事件との関連性や、警察の捜査体制に不備があったのでは？　などと被害にあった刑事を当初同情しているかのように報道していたメディアは、この刑事が最近欝気味で幻覚を訴えていたなどとスクープが流れた瞬間に手の平を返し、やがて面白可笑しく無責任な噂が一人歩きしだすようになった。

「そちらは柏木天太（かしわぎ・てんた）さんでしょうか？　警察の者ですが」
その件で、警察から俺の携帯に電話があった時は驚いた。

考えてみればあの刑事さんに携帯番号を教えてたからなぁ。
面倒だな、と思いながら俺はその電話を掛けて来た女性警官に応じた。
そして、逢って話をしたいと言うので指定した日時にその婦警さんと待ち合わせた。

俺は《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ　Ｏｎｌｉｎｅ》略してＵＧＯを起動するためにサングラスを掛け、俺の守護霊である《アリアンロッド》を呼び出す。
アリアンロッドは銀色の楔帷子を身に付けた銀髪の勇ましくも美

しい女性の姿をしている。

この場所は周囲の人通りは多いが、明らかにこの場の雰囲気にそぐわない外国人で騎士の格好をしてる《アリアンロッド》に対し、通行人は誰一人として反応しない。

なぜなら、俺以外の人間には守護霊(アリアンロッド)が見えないからだ。

《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ　Ｏｎｌｉｎｅ》の《虚霊》はヒトの目には映らない。

俺は人間サイズの《アリアンロッド》を、ドール・サイズへと小さくする。

現実のヒトでは在り得ない現象。

《守護霊》が《虚霊》の一種だからこそ出来る芸当の一つだ。

サングラスに《アリアンロッド》視点でのサブウィンドウを表示して準備完了っと。

このサブウィンドウには、俺の守護霊である《アリアンロッド》をカメラ代わりにして、彼女の視線で見たまんまのリアルタイムな景色を映し出すことが出来るんだ。

今は俺の隣に《アリアンロッド》を立たせているから、俺が見ている物とサブウィンドウの景色に差はほとんど無い。けれど、その気になれば《アリアンロッド》を数百メートル離れた場所へ派遣出来るし、目標物を指定して『フォロー』などの追従命令が出来るので、使い方によっては物凄く便利な機能となる。

それに、堂々とカメラを向けて映しているのに、そのカメラは誰にも見えない。

男の子なら、それ聞いただけでワクワクしねぇ？

男なら、誰だってやることは決まってるだろ！？

《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ　Ｏｎｌｉｎｅ》とは謎の運営団体が提供している謎のオンラインゲームだ。
このゲームのプレイヤーは、このサングラスを通して表示されるゴースト……ＵＧＯでは《霊》もしくは《虚霊》と呼ばれる存在と《守護霊》と呼ばれる自分が操るゴーストとを戦わせて遊ぶ、ＲＰＧにカテゴライズされるゲームだ。
守護霊を戦わせて、場合によっては新しいゴーストを仲間にして育てて戦う。

サングラスには高精細に表示される拡張現実、ＡＲ（Ａｕｇｍｅｎｔｅｄ　Ｒｅａｌｉｔｙ）と呼ばれている高度なバーチャル表示機能を備えているし、サングラスの耳に掛けるツルの部分には携帯電話のような小さいスピーカーも内臓されているらしく、装着者にだけはゴーストからの声もリアルな感じで聞こえる。

ちなみに俺は、このサングラスの動作原理を全く判っちゃ居ない。
俺は、このサングラスを買ってから一度も充電を行っていないし、そもそも充電器すら無いのに何も問題なく今も動作している。
謎の運営団体と同様、このサングラスも謎だらけだ。

両目で普通に見える３ＤのＡＲ表示というのが、そもそも技術的に怪しい。
ある距離の物を両目で見ると、手前の物は２つに見える現象を生理的複視というのだそうだ。
遠くの景色を見ながら目の前に右の人差し指を立てると、一本の指が二本に見える。

本来なら、サングラスに表示された画像は目の前にあるから、遠くのものを見るとサングラスの画像は2重に見えてとても見苦しくなるハズなのである。
なのに、このＵＧＯのサングラスにＡＲ表示されている画像は生理的複視が起きない。
どの距離感で見ても、サングラスに映される画像が2重に見えることがないのだ。
そのため、３Ｄ酔いもしない。

もっとも、技術的にはそれを防ぐ単眼ＡＲ表示というものも世の中には存在している。
ベジータが片目でスカウターを見るような代物で、片目で見るというのがミソだ。
その代わりに、効き目でＡＲ表示を見なければ非常に見辛いという副作用が付く。

インターネットで調べてみても、こいつと同程度の拡張現実表示はまだ夢の技術だ。
せいぜい自動車の運転座席にヘッドアップディスプレイと呼ばれる物で、道路の分岐にあわせて矢印表示をしたり、マークと呼ばれる物にカメラ付きスマホを向けると、個々のマークを識別してモニター画面にコンパニオンがＡＲ表示され、商品説明してくれたりする程度なのだ。

このＵＧＯサングラスの様に現実の町並みを両目の肉眼で見ながら、さらに守護霊視点の映像をリアルタイムではっきりと重ねて、仮に背景の景色が重なってウィンドウが見えずらい時には表示位置や色合いをＡＩが自動認識して変更表示する賢い機能を実現したＡＲ表示など存在しない。

守護霊の操作方法も俺の視界内で手を前後左右上下などに動かすことで、守護霊の動く方向を自由に、俺の意思で操作することも出来る優れものなのだ。
物体認識とか、移動体認識って言うの？これ。

思い返せば、亡くなったというあの刑事さんともこのゲームを通して知り合った。

俺にしか見えないこの守護霊（アリアンロッド）を使って、道行く女性のスカートの中を片っ端から……ゴホゴホ。もとい、男のロマンを探し続けていた時、その現場を俺と同じくＵＧＯのサングラスを掛けた刑事さんに見つかって、現行犯タイーホされちまったんだ。
誰にも見えないと油断してたら、同じＵＧＯプレイヤーからは丸見えだったというわけ。

「ちょっ、刑事さんこの世に存在しない守護霊を使った犯罪なんて立証出来るの！？」
とっつかまってタイーホされちまった俺はアセッてそう尋ねた、そしたら、

「おぅ？　そうだなー。とりあえず、お前の学校に名指しで盗撮犯の疑い在り、とかで尋ねても良いんだぜ？　俺ってば粗忽者だからよ？　うっかり未成年者への気遣いとか、どっかに置き忘れちまったりしてな」
「ごめんなさい、勘弁してください。アニキ」
「オメーよー。盗撮とかガキっぽいことすんな！！いーな？　んなのバレたら女の子に嫌われちまうゾー？」

「ハイ！これからは心を入れ替えさせて誠心誠意！　誠の心で生活させて頂きマス！」
「ああ、そうしろ」
刑事さんは、ちっとも俺を信じてない顔でそう言ったっけ。
きっと説教したかったダケなのだろう。

「でもさ刑事さん。真面目な話すっけど、ＵＧＯ使って『あ、この娘の秘密知りてー』とか考えたこと無かった？」
「あ〝！？　オメー反省してねーダロ？」

「うわ、さては刑事さんの周りに魅力的な女性居ねーんだ！？」
「アホか。　……居るさ。最上級の女なら」

「おおっ！？ィィネ、イイネ！　それなら。男だったら撮って撮って撮りまくって、一枚でも多くのお宝をゲットするモンなんじゃないんですか！？　沖田艦長！！」
「どこの古代マモルだよ。そんなに撮りたきゃイスカンダル行って自分の恋人に頼め。それに、ホントに惚れてたら盗撮なんてマネは、出来ねーんだぁよっ」

「まぁまぁアニキ！　ここはアニキの見果てぬ願望を俺が叶えるって事で、一つ見逃しちゃくれませんかねー？」
「あ〝！？　誰に物言ってんだ？コゾウ。証拠がネーってだけで、俺に現行犯を見逃して、さらに犯罪行為の教唆をシロってか？」

刑事さんの上向きの手の平に打ち合わせ、そして手の平を逆にしてタッチ、さらにハイタッチを交わす俺と刑事さん。

「そうですよね！！盗撮は犯罪ッスよ。もちろん、そんなワケないじゃないですか」

「ああ、盗撮は犯罪だ。もう二度とするな！！　んで男の約束忘れんじゃねーゾ！！」

「「ＷＡＨＡＨＡＨＡＨＡ……」」

ノリが良い刑事さんだった。惜しい人を亡くしたモンだ。
きっとあの約束はただの冗談だったのだろう。この東京で偶然出会う確立はほぼ無いから。
そんな風に故人を偲んでいたのが悪かったらしい。無意識に踏み切り待ちしてた俺は、話しかけられた声に対して、何の気なしに答えてしまっていた。

「コンチワ。なんだか楽しそうだねぇ、あんちゃん」
「ああ、コンチワー、ちょっとね……」
俺に話掛けて来たのは声からすると老人だった。俺は見向きもせず軽く答えた。

「そうかい、良いねぇ若いってことは」
そうして、その老人の声は、どんどん口調が重くなり、声のトーンが低くなる……

『ワシもね、かつてはそんな風に毎日楽シカッタ気ガスルヨ』
カン・カン・カン・カン……
やけに五月蝿く踏み切りの音が辺りに響いている。

『ナア、アンチャン、ワシ、マイニチガタイクツデ……キガクルイ

ソウナンダワ』
慌てて振り向いた俺のサングラスに映るのは……
千切れかかって首の皮一枚で繋がり、半ばぶら下がった首と、頭部の穴と言う穴から真っ黒い血を流し、目は洞のような黒い空洞。片腕片足が無い血だらけの姿で線路脇に立ち、俺に向かって残されたもう一方の手を伸ばす老人だった。
『アンチャン、あの世デ退屈ヲ紛らわしてクデヨォ……ォォオオオオ』
この世ならぬなんとも言いがたい昏い声。
夜に独りっきりの時は耳にしたく無い、マヂで。

ちぃっ、油断したっ！！
まさかこんな真っ昼間から、ノンアクティブな《霊》に出遭っちまうとは思って無かったってのもある。
《死霊：自縛霊　Ｌｖ８》と老人の頭の上にＡＲ表示のタグが表示されている。
俺は戦うために、ドール・サイズの《アリアンロッド》を急いで人間サイズに戻した。

この《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ　Ｏｎｌｉｎｅ》というゲームでのゴーストは、自動的に襲ってくるかどうかの区分けで、三種類が存在する。
アクティブ・ゴーストは、こちらが何もしなくても襲ってくるタイプ。
パッシブ・ゴーストは、こちらが襲わない限り攻撃してこないタイプ。
こいつの様に、相手にしちまうと襲ってくるのがノンアクティブなタイプだ。

《霊》あるいは《虚霊》との戦い、それもまたＵＧＯというゲームの特徴だった。
普段こういった自縛霊や浮遊霊とは目を合わせ無いように注意して、声を掛けられても反応しないことで何事もなくやり過せるんだけど、今日は注意散漫だったようだ。

見かけても目を合わせ無い。
声を掛けられても返事しない。
霊に祟られない知恵だ。昔の人は良いこと言った。

トーコさん天太と出逢う？（後書き）

'２０１１／１２／０７
しまった。
＜　片腕片足が無い血だらけの姿で
片腕が無いのに、どうやって腕もぎって振り回したんだろう。
単純ミス。すんません。脳内で補完よろ。
きっと霊は物理的に腕を掴まなくても、宙に浮かんだままの腕で殴れるのだろう。
とか？

＝＝＝
ようやく主人公のターンになりましたが、しばらく、彼にはＵＧＯを語らせたいと思います。わたしが書く男の子なんて、しょせんそんな役回りさー

自分は小説の修行のために投稿しているのではなく、好きなものを書く、というのが原動力です。
そのため、ストーリーを批判されても直す予定も無く行き場がありませんので、スルーして頂くのがお互い楽な道だと申し上げておきます。

トーコさん天太と出逢う？

その姿はまさに、蝶のように舞い、蜂のように刺すと表現するに相応しい。

俺は《アリアンロッド》の戦う姿がとてもスキだ。

べつに俺が彼女に着せてる服がミニスカで、パンティーが丸見えだからってワケじゃない。

いや、もちろん、それもあるけど。

《アリアンロッド》は現実のニホン女性では在り得ないプロポーションを誇る。

銀の髪、透き通るような湖を彷彿させる蒼い瞳、小顔は黄金率のバランスで超美人だ。

年の頃は俺と同じくらいにも、幼いようにも、年上の女性にも見える。

ありていに言えば理想的な女性が等身大にして堂々と目の前で生き生きと動いているのだ。

水晶のごとき透明な空気を纏い、深い洞窟の澄んだ湧き水のような爽やかな薄い微笑み。

その清冽さに魅せられている、と言ってもいい。

《アリアンロッド》の戦い方、というか、《守護霊》の戦い方は基本的に殴る蹴るだ。

《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ　Ｏｎｌｉｎｅ》では武器という物を見かけたことは無い。

チャットでもちょくちょく話題に出るけれど、誰かが武器をゲットしたって話も聞かない。

武器って存在するのだろうか？このゲームで。

なので《アリアンロッド》は徒手空拳で戦う。

そして、彼女の格闘技には型が無い。一つとして同じ動きの技が無いのだ。

野生の狼のように、身体の動かし方を知り尽くしたかのような動きで力強く、しなやかに動き、捕食者がそうであるように、動きの静と動の切り替えは人の反射神経を大きく上回る。

その変幻自在な動きは、流れる水のように一時も同じ姿を留めない。

銀の鎖帷子がシャラシャラと、まるで彼女専用のＢＧＭのように聞こえ続けている。

基本的な動作は俺が手で指示を出しているけれど、彼女の行動は俺自身の意思を越えて動いていると感じることも多い。

障害物をジャンプで飛び越えて攻撃したり、その障害物を利用した三角飛びでの攻撃や、障害物を盾として戦ったりと、人間だったらそんな風に賢く動くだろうと思えるような行動をとる。

時には俺の意思すら越えて自由に行動している、と考えさせられることも多い。

《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ　Ｏｎｌｉｎｅ》では、戦うにあたって自動的に一定範囲のバトル・フィールドが築かれる。これは人払いの結界も兼ねているようで、戦ってる俺のマヌケな姿を赤の他人に見られずに済んでるんだ。

《守護霊》に指示を出してるプレイヤーの姿は、《霊》や《虚霊》が見えない一般の人々からのハタから見て、独り芝居にも似て滑稽だろうと思えるから、この結界機能はスッゲー助かる。

このバトル・フィールドの結界効果は人間の無意識下に働くようで、たとえ道路のど真ん中で戦っても、ヒトはもちろん車も全て俺たちを避けて通る。

バトル・フィールドは《霊》と《アリアンロッド》と俺とを完全に覆い隠すように展開されるらしいが、《霊》と《アリアンロッド》は動き回るので、フィールドもそれに追従して動く。

ビックリだったのは、以前《霊》が急に跳び付いてきたせいで、結果的に通行人を巻き込んじまったときだ、通行人のお姉さんに《霊》の攻撃が当たる！と思った瞬間、お姉さんがヒョイと何気に避けた。そのお姉さんは騒ぐでも無く、何でも無かったかのように歩み去ってしまった。

どうやら本人は、自分がナニかを避けた、という自覚すら持たなかったらしい。

人払いの結界マジパネェ。

なし崩し的に始まっちまった老人の霊との戦いは、敵がＬｖ８なのに対して《アリアンロッド》がＬｖ１０とレベル差もあって、わりとあっさりと勝負が付きそうだ。

あと一撃で倒せる。

そんな風に油断したのが行けなかったのだろうか？

突然、死霊は己の片腕をもぎ取り、もぎ取ったソレを棍棒のように振り回して反撃してきた。

『ガッ』

回避が遅れ、《アリアンロッド》の胸部に痛撃を受けてしまう。
「っガッ」
同時に俺の胸にも強烈な痛みが走った。痛みに思わずヨロケて、うずくまる俺。
【霊障：バックラッシュ】によるダメージ・フィードバック現象である。

いま俺が受けた痛みは、《アリアンロッド》が受けたであろうダメージのたったの数パーセントに過ぎないハズだ。
それなのに、これほどの痛みなのか。

だけど、このままうずくまってるワケには行かない。
今は戦闘中なのだ。どんなに息が詰まりそうな痛みでも我慢する必要がある。
俺は死霊のトドメを刺すべく《アリアンロッド》へ指示を出した。

「いってて、おー痛ぇ」
あの自縛霊と化していた老人も、こうして戦いに負けることで霊力を奪われ続け、やがて此の世の未練・執着を完全に浄化され、成仏するんだそうだ。
ＵＧＯというゲームは、ゲームという形を取っては居るものの、《除霊》という側面も併せ持ってて、単なる遊びでは終らないシロモノだった。

近年、人の持つ欲望も複雑・多様化し、昔よりも未練を残して成仏出来ずにこの世で《幽霊》となってしまうパターンが増えているのだそうだ。

この世にあまりにも多くの《霊》が溢れるようになると、あの世とのバランスが崩れて、世界にとって良くないんだとさ。誰かが《霊》を浄化して本来の転生の輪に戻してやる必要がある。

《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ　Ｏｎｌｉｎｅ》ではゲームをただ遊ぶだけではなく、そういった成仏出来ない《霊》を倒すことで、浄化する役目も同時に兼ねているんだとさ。

こういったことは、《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ　Ｏｎｌｉｎｅ》のチュートリアルでバックボーンの世界観として説明される。

メイン・クエストを次々とこなして行くと、そういったゲームの世界観を深く識ることが出来るのだとチャットで聞いた。

なんでも、最終的には神サマを尋ねて、直々に称号と世界の秩序守護者として今後も働いて欲しいと依頼を受け、クエストのエンディングを迎えるのだそうだ。

そこまで辿り着いたヒトって居るのだろうかねぇ？

そこまで行かずとも、こうして《除霊》に一役かって隔世のバランスを取ってる現状は、もはや、ゲームであってゲームでは無いシロモノだと思う。

生と死の天秤を保ち、世界の霊的システムを裏から支えるボランティア活動そのもの。

ゴースト・ハンターって職業はカッコ良いって思ってた時期もあ

るけど、実際、自分がやってみるとメンドクセーことコノ上無い。
普通に考えれば、何ソレ、ウゼーってゲームなんだと思う。
だがしかし！　俺にとって《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ　Ｏｎｌｉｎｅ》とは、すなわち男のロマンであり、メンドクサイ背景事情を背負ってでも何物にも変えがたく捨て難い、もはや俺の人生に無くてはならないツールとなっているのだ！！

なんてカッコツケて気を紛らわそうとしても身体から訴えてくる、ＵＧＯのもう一つの特徴。
今現在、こっちの方がよほど重要だ。
「痛ぇ……ホント、これがなきゃＵＧＯは最高のゲームなんだけどな」

ダメージ・フィードバック・システム。
《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ　Ｏｎｌｉｎｅ》において、【霊障：バックラッシュ】と呼ばれる現象のそれ。
ＵＧＯは《守護霊》を操って《霊》《虚霊》を倒すゲームだ、けれど、そこにはどうしても敵から攻撃を受けてしまう可能性が存在する。
条件はまだ完全には判って無いそうだが、おそらく敵から強い攻撃を受けると、一定確立で《守護霊》が受けるダメージの数パーセントが、プレイヤーに跳ね返って来るという噂だ。
家庭用ゲーム機でもフォースフィードバックとかでダメージを受けるとコントローラーがブルブル震える機能があるが、それの強化

版って所なのだろう。
さっきの戦闘で、老人の自縛霊から一発イイのを喰らっちまった（涙
Ｌｖ１０以下の低レベルのプレイヤーは、ボスを除くアクティブ・ゴーストから襲われないよう、ＵＧＯのシステム制約によってルール上は護られている。
なので、こうして外を歩っててても予想外の戦闘に巻き込まれることはそうそう多くは無い。
年中痛い思いをしなくて済む。
けれど、Ｌｖ１１以上からはＰＫ含めた全ての敵から、見境無く襲われちまうのがルールだ。
Ｌｖ１１にレベルアップする際に自動的にポップアップするダイアログ画面で、その旨の警告と確認のメッセージは何度も行われる。
その結果、俺の様にＬｖ１０からはレベルアップせず、ずっとＬｖ１０のまま留まってＵＧＯを楽しむ『ヘタレ』なプレイヤーは多い。
でもさぁ。
敵のレベルが高いほど、【霊障：バックラッシュ】でフィードバックされるダメージも高くなって行きます、なんて警告メッセージで言われたら、ビビるぜ？　マヂで。
なんせ、たったＬｖ８しかない敵のダメージですら、ムチャクチャ痛いんだからな。
「だがっ、こんなことでへこたれてたまるかっ！！」
そう、お楽しみはこれからなのだから！！

ミニスカポリスの婦警さん（妄想）、カマーン！！
俺は待ち合わせ場所へ向かって自然と駆け足となる。
これが男のネイチャーってヤツなのかねぇ？

トーコさん天太と出逢う？（前書き）

ふ～、ずいぶん削除しました。
あらためて読み直すとＲ－１５を越えていたよ

※盗撮は犯罪です、決して真似をしないでください。
良い子のみんなは、やっちゃダメだよ。

トーコさん天太と出逢う？

俺はミニスカの婦人警官を半ば期待しながらデジカメを準備しつつ、待ち合わせした場所へ先に着いて待つ。電話での声の感じでは若いお姉さんだったけど……

もちろん、《アリアンロッド》はドール・サイズに戻してあるぜ。

《アリアンロッド》の視界スクリーンショットを撮るためのコマンドは、システム的に盗撮防止のためなのだろう。プレイヤー自ら一定以上の声量で発声しなければならない。

俺は『ハイ、チーズ』という普通の掛け声をボイスコマンドとして登録しているので、こうして普通のカメラを向けてコマンドを発声すれば、相手には不審に思われても、バレたことはこれまで一度も無い。

ミニスカポリスのお姉さん（まだまだ妄想中）を、そんな風に準備万端整えてドキドキしながら待っていると、通りの向こうから女性が一人やって来るのが見えた。

うわぉっ！！

その女性がサングラスの視界に入った時、最初はＡＲ表示なんじゃないかと疑った。

それくらい、綺麗な女性だった

芸能人……じゃない……よね？ＴＶで見たことないし。

背たっか！　足なげー！　そしてそして、すげぇ美人！！これはアタリだぜっ！！

いましがたその女性とすれ違った金髪女子高生とを見比べると、全身のスタイル……特に首や足の細さや長さ、それにウエストの位置とかが……おなじ人類を見てる気がしない。

冗談みたいだが、アニメのヒロイン体型に近い。

でも完全なアニメ・ヒロイン体型かと言うと、異論が出るだろうな。

なぜなら胸の隆起は、低学年向けのソレを遥かに超えていたから。

そんなプロポーションの持ち主、リアルで初めて見た。

美人で巨乳ってなら整形でなんとかなるけど、身体のバランスはどうにもならないから。

薄いピンクの服から覗く、くすみなんて全然無い健康的でキメの細かい象牙色の肌。

こんな綺麗な肌の女性、ＣＭとかでしか見かけないよ……

一歩間違えれば銀座辺りのお水の女王サマに見えなくも無いが、その女性から発散される一本筋が通った凛とした雰囲気が、風俗のような退廃的さを感じさせない一因だった。

さらっさらの黒髪をポニテにし、その歩き方はモデルというより、アスリートのように常に腰の高さが一定で身体が左右・上下に全くブレない。

単純な足運びという動き一つ取っても、そこに無駄な動きが一切見あたら無いって、スゲー。

小さな顔は黄金率というか、全てが平均的というか特徴が無いと

いうか。
あまりに整ってるせいで遠めにはパッと見で地味に見える。
けれど近寄ってみれば、際立った美しさはコンパニオンとか足元にも及ばないな、この女性。
常日頃から写真を趣味にしている俺の目には、文句の付け様が無い美人顔であることは、一目で看破出来た。

大きな丸いメガネと、押し上げる胸の隆起が目を惹き付けて離さない。
おっぱい&メガネ。
きまった！この女性をパイメガ婦警と呼ぼう！！

俺は一目で直感した。
このパイメガ婦警さんこそ、あの刑事さんが惚れてた《最上級の女》なのだと！！

その超ド綺麗な婦警さんは俺から3メートルほどに近付くと、声を掛けて来た。
「貴方が柏木天太さんですか？」

うぉおおおおおおおお
形の良い唇から紡がれる耳に心地いい柔らかく優しいアルトの声！！
期待通りにスカート！！　前が短くて後ろが少し長い形で、ミニではないけれど淡いピンク色のスカートで、これがカンジンだが膝上だ。

女性は腕を胸の前で組み、両足を肩幅に開き心持ち右足に体重を

あずけ艶やかに立っている。

うぉおおおおおおおおおおこれは絶景のヨ・カ・ン！！

俺の目が自然と血走る。

よ・よしっ、往くぜ……イクぜ！！

漢・柏木イカせてもらいます！！

「そうです、柏木です」

そう生返事を返しながら、俺は右手でデジカメを婦警さんに向け、撮るフリをしながら、左手の動きで、ドールサイズとなっている守護霊（アンロッド）を操って、婦警さんの両足の間へともぐり込ませるべく駆らせる。

俺の心臓は、バックンバックン爆発しそうな勢いだ。

「す、すいません写真撮らせてください！！」

とパイメガ婦警さんに声を掛ける。

落ち着け！俺。声が上ずってるぞ！

「え？」

婦警さんはそう言いながら、一瞬チラリと地面に居る《アリアンロッド》へ視線を移した。

俺の心臓はその瞬間ドキン！！と跳ねたが、直ぐに思い直す。バレるわきゃねーんだ！！

もし、この婦警さんがＵＧＯのサングラスをしていれば、俺の《アリアンロッド》は婦警さんに見えちまうし、俺がやろうとしてる行為もバレバレだろう。

が、この婦警さんが掛けているのは普通の丸いメガネだ。

ＵＧＯプレイヤーじゃないんだから、この俺の行為がバレるはずは無い！！

婦警さんは直ぐ俺に視線を合わせ、可憐に微笑みを浮かべ（ふぉぉぉおおおおおお）

「ダメよ、お姉さんはモデルじゃないのよ？」

などと言う。

やべぇ、鼻血出そう。

これはもう勢いで行くしかないっしょ！！

急いで婦警さんのスカートから覗く肩幅に広げた両足の間に《アリアンロッド》をもぐり込ませ、真上を見上げさせる……俺のサングラスのサブウィンドウに、婦警さんのスカートの中が映し出された……

「『ハイ、チーズ』」

デジカメのシャッターを切ると同時に、ボイスコマンドで《アリアンロッド》の視界スクリーンショットを撮るためのキーワードを発声する。

黒！！！！！！！！

すっっげーーーーー綺麗なおみあし。

贅肉一つ無い形の良い足は肩幅に広げてるため、全てが丸見えだった。

布目やミシン目すらハッキリ視認出来る高画質なＳＳは刺繍の一つ一つも神々しい。

完璧なショット！！　オレ乙！！

リアルの若い綺麗な私服婦人警官だっつーのがレア度たっけー。

お、お宝だー。お宝ゲットだぜーーーーーっ！！！

勝手に浮かれてる挙動不審な俺を、呆れた目で見つめるパイメガ婦警さん。
それに気付いて、少し態度を改める。
おっと、せっかくのチャンス、これっきりにするにはもったいなさ過ぎる。

夜明け前、左隣でかすかな寝息を立てている彼女が起きるまでにはもう少し間がある。
俺は彼女が起きないよう、なめらかな肌を右手でなぞりつつ感触を楽しむ。
と、彼女が目を薄く開けた。

『天太？　もう、夕べあれだけシタのに』
『キミが黒い下着を身に着けたら、それが合図だからね。頑張っちゃうさ』
『うふふ、天太は黒がお気に入りだものね』
『もちろんだよハニー。初めて出逢った時も、婚約した日も、初夜の晩もそうだったろ？』
『まさか出逢って直ぐにホテルに連れ込まれるなんて、あの頃は思っても見なかったわ』
『今では？』
『いやだわ、あたしの下着は全部黒じゃないの、ヤダ、言わせないで、恥ずかしい』
『それじゃ、さっそく朝の一番絞「……ぎさん？　柏木さん？　大

丈夫ですか？」

うぉっ！？
い、今のは予知夢か！？
んなわけないか。ははは。

「ぁあ、すんません、婦警さんがあんまりキレイだから見とれちゃって」
えーっ、まずはお知り合いになって、それからホテルに誘うとするか。
俺のナンパが勝率ゼロだったのは、この時のために運を取ってあったんだな、きっと。

「先日亡くなった刑事の件で、お時間取って頂いてありがとうございます、まずは落ち着いて話が出来る場所へ移りましょうか」
ぬぉ、軽くスルーされてるぞ？　だがしかし！！
「ああ、それなら向こうにイイ感じのホテルがあったんでそこでどうっスか？」

「自分はホテルよりスタバの方が好きなので、そこのスタバでお話させてください」
くっ、好きとか言われると、そこへ行かざるを得ないじゃないか。
ことわり慣れてるな、さすがに。

「でも、故人のプライバシーにも関係あるし、周りに人が居ると落ち着かないし、話せない内容も出てくるんじゃないかと思うんスよ」

自分でもかなり強引だけど、これだけの美人。この先お目にかかれないかも！？
ガンバレ！俺。

「大丈夫ですよ、最近の警察はオープン化が進んでるんですよ？脱密室ですからv」
ぬ～、さすが本職の官僚答弁。
微妙に意図をズラして、こちらの話を煙に巻こうってんだな！？

「さぁ行きましょう、立ち話もなんですから」
そう言ってスタスタ歩いていってしまう婦警さん。
ちょっとしたヒールの靴を履いてるのに、膝を伸ばしてカッコ良く歩く女性だな、このヒト。
世の中には、ちょっとキレイだとこれ見よがしにモデル歩きして鼻につく女も居るのに、好感度のポイントも高い。

しかたない、うしろで形のいいお尻を見ながらついて歩く俺。
このシリ、いつか俺のモノにしちゃる！！
さっきの妄想もゼッテェ実現させてやるぜ！！

『ピッ』
システム・メッセージ：守護霊称号　《ハイディング・ハンター》を獲得しました。

『ピッ』
システム・メッセージ：守護霊称号　《デリュージョン・マスター》を獲得しました。

この時の俺は《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ　Ｏｎｌｉｎｅ》では個人情報保護や盗撮行為防止のために《妄想補完》なる機能をシステム側で備えており、女性のスカートの中を盗撮しようとしても、真実の映像とは全く異なるバーチャルな偽の映像が妄想によってサングラスへＡＲ表示され、そのフェイク画像をスクリーンショットに落としているのだ、などとは全く想像もしていなかった。

つまり、黒のパンティーは俺の妄想だった事が後に判明する。

さらに、この時の盗撮行為によって、この超絶綺麗な婦警さんに後々までパシリ扱いされ、地獄の底の底まで付き合わされ、考えようによってはパラダイスな人生を送るハメになろうとは、この時点での俺は全く思いもしなかった。

だが、しかし！！

画像がフェイクだと知ってたら、やらなかったか！？

何度自分へ問い掛けても答えはノーだ。

たとえ事実がどうであろうとも。

俺にとって、初めて出逢った時のトーコさんが黒のパンティーをはいてた事は、生涯悔いの無い絶対の『真実』なのだ！！！！

それが漢ってモンだろ！！

トーコさん天太と出逢う？（後書き）

次の投稿も、ちょい時間を頂きます。

トーコさん珠璃と出逢う？

スタバでコーヒーを買い、なるべく店の隅に移動して、恐々と婦警さんに用件を尋ねる。

「えーと、聞きたい話って何っスか？」

相手は超絶美人のパイメガ婦警さんだ。

……スか？、……スよね、と語尾にスをつけると、目上の人相手の話し方になるよな？

少なくても俺的には、もうサイッコーに気をつかった言い方なんだぜ？

「まず……自分は警視庁刑事部捜査一課の藤井です」

婦警さんはそう言って警察手帳を開いて見せる。

「婦警さんの名前は……藤井陶子さんですか。警部補！？　そんなに若いのに」

驚くと、ニッコリ微笑が返って来た。

「先日、警視庁の刑事が殉職した事件について捜査を行っています。その件について何かお心当たりはありますか？」

「あ、あの……」

「はい？」

「その刑事さんがどうして亡くなったのかは知らないっス。けど、その人とはゲームで知り合ったんで、何度か一緒に遊んだことはあるっス」

「ゲームですか？　どのようなゲームでしょうか？」

「えっと、あの《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ　Ｏｎｌｉｎｅ》ってネトゲなんスけど、知ってます？」
「亡くなった刑事からはそのようなゲームの名前は伺ってませんでした。どのようなゲームなのか伺ってもよろしいでしょうか？」
婦警さんは小首を傾げながら、教えて！！って感じでの表情で俺に尋ねてくる。
ふぉぉおおおお、なんてイロっぽい婦警さんなんだ！！
さすがパイメガ婦警、一部のスキも無いって感じだぜ！！
合格！！

「こいつみたいなサングラスを使ってアクセスするネトゲなんスけど……」
俺は婦警さんにも見えるよう、顔からサングラスを外して見せた上で《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ　Ｏｎｌｉｎｅ》についての概要を婦警さんに説明する。

婦警さんは俺からの説明で、彼女のセンパイ刑事と逢ってた人間がもう一人居ることを聞くと、その人物もココへ呼び出して欲しいと俺に頼んで来た、なのでメールで逢えないかを打診する。
その人物は珠璃という名で、俺と同い年の結構イイ線をいく可愛い娘だ。
彼女ともＵＧＯで知り合った。それ以来、何度かパーティーを組んで遊んでいる。

しばらくすると、メールでＯＫの返信が返って来た。
「今、西国分寺駅だっていうから、ここに来るまではもう少し時間掛かるみたいっスよ」

「なら、あたし達も新宿駅へ移動しましょうか、その方が早いでしょう」

新宿駅へと移動しながら、俺はメールで新宿駅西口での待ち合わせを連絡する。

俺はサングラスを掛けなおし、隣のパイメガ婦警さんをチラチラと盗み見しながら周りをよく見てみると、すれ違う男ドモの振り返る率がハンパない。というかモレなく彼女を見ていくのだ。

道行く男どもが全員振り返るようなイイ女連れは、俺の人生で初めてだった。

すげー、気分イイ。

呼び出したもう一人の人物……珠璃も可愛いので一緒に歩くと注目を受けるが、ここまでヤローどもが振り返るのはコレまで経験が無いゼ。

メトロ食堂街のフルーツパーラーに入り、珠璃が来るのを待つ。

一応目の前にはジュースを置いてあるが、さっきコーヒー飲んだので手をつけてない。

婦警さんはさっきも買ったコーヒーに口を付けなかったが、ここでも買ったまま放置してる。

勿体無いなー、とは思うがこれも婦警さんのおごりだしスルーしとこ。

婦警さんからは俺が亡くなった刑事さんと何をしてたか、どのように知り合ったのか？

そして肝心のアリバイの有無を聞き取り調査された。

もっとも、知り合ったキッカケを正直に言いはしなかったけどね

（汗

それがすむと、次に《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ　Ｏｎｌｉｎｅ》についての詳細を尋ねて来る。

「そのサングラスは普段から掛けてるの？」

「そうっスね、大抵掛けてるかな？　……あれ？」

「？？　どうかしましたか？」

「いえ、あの……」

変だな？ＵＧＯプレイヤーでもない人が、俺の顔に掛けてるサングラスが見えるなんて。

「えーと、婦警さんはこのサングラス見えてるんですか？」

「？？　ええ、普通に見えるけど？　どうかしたの？」

「《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ　Ｏｎｌｉｎｅ》のプレイヤーじゃないとこのサングラスは見えないハズなんスよね」

「……そうなの？　たぶん……プレイヤーだけが見えるんじゃなくて、そのサングラスを知ってるかどうかで見える、見えないが分かれるんじゃないかしら？　自分はセンパイの刑事がそのサングラスを掛けてたのを知ってたし、さっき柏木さんからもサングラスの事を聞いたから」

そんな物なのかねぇ？　俺はプレイヤーだからその違いはもうすでに判りようが無いな。

目の前で普通の眼鏡を掛けてる婦警さんはイマドキ見かけない大きな丸いレンズ越しに、俺の顔をじっと見つめている。

ぉおっと、そんなどうでもイイこと気にしてる場合じゃないな。

「そんなモンなんですかね。このサングラス掛けてても普通は気付かれないし、どうやら俺の素顔が見えてるみたいなんスよ、これま

で授業中でも先生から注意を受けたことは無いっスよ」

「なるほど、その機能も興味深いですが、とりあえず《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ　Ｏｎｌｉｎｅ》の詳しい話を聞かせてください、さっきより細かい部分を知りたいです」

概要はここ来るまでに語り終えたので、もう少しゲームの詳細部分に踏み込んだ説明を行う。

このサングラスを掛けないと、ＡＲ表示が見えないこと。

なぜか持ち主を判別するらしく、他人に貸してもそのヒトにはＡＲ表示が見えないこと。

俺のサングラスを婦警さんに貸して、やっぱり何も見えないことを理解してもらえた。

《守護霊》のこと。

《霊》《虚霊》のこと。

ゴーストの強さは『レベルｘレシオｘランク』で表現されていること。

Ｌｖ１０ユニーク・エリート級などと言い表している。

レベルの上限は、５０であること。

レベルが２倍になると強さは４倍になること。

これを頭に入れて敵とのレベル差を考え、戦うかそれとも逃げるのかを決めるのだと教える。

レベル１を基準に考えた時、←←←単純に、このような強さ関係になる。

Ｌｖ１　ｘ１

Ｌｖ２　ｘ４

Ｌｖ４　ｘ１６

Ｌｖ８　　ｘ６４
Ｌｖ１６　　ｘ２５６
Ｌｖ３２　　ｘ１０２４

低レベルの時には、１⇒２へのレベルアップだけでも、《守護霊》が４倍の強さに成長するので、すっげぇ自分が強くなった気になれるのだ。

さらに、強さはレシオ（倍率）によっても変化する。

マイナー　ｘ１／２
ノーマル　ｘ１
メジャー　ｘ２
ユニーク　ｘ４

守護霊はレシオがメジャーなので、同レベルのノーマルゴーストより２倍強いのだそうだ。

また、強さはランクによっても決まり、ランクが一つ上がると強さは４倍となる。
同じレベルでもランクが高い方が４倍強いことになる。ランクは弱い順から、

ノーマル　ｘ１
エリート　ｘ４
キャプテン　ｘ１６
コマンダー　ｘ６４
ジェネラル　ｘ２５６

ヒーロー　　ｘ１０２４
レジェンド　ｘ４０９６

そんなワケで、俺の《アリアンロッド》の強さは、Ｌｖ１０メジャー・ノーマル級となる。
独り（ソロ）で戦うならノーマル級を、ペアや少人数で戦うならエリート級を、パーティで戦うならキャプテン級を狙うのが経験値を稼ぐのに効率的とゲームチャット上では言われている。

もっとも、俺はキャプテン級以上は見たこともないけどねっ　はっはっは。
つーか、そのランクはソロじゃ勝てねぇよ。

ゲームの詳細をあらかた話し終えた俺は、この婦警さんとよりいっそう仲良くなりたい一心で、なんとか個人的な話へ持っていけないかと四苦八苦していた。
俺と、もうすぐここへ来る珠璃のそれぞれの《守護霊》レベルなんかを話していると……

「あーっ！！　何で他人のレベルを勝手に教えてんのよー」
唐突に店内に女の子の声が響く。

「あ、きたきた。いいだろ？どうせ教えるんだからさ」
「そういう問題じゃないでしょ？　たかがレベルと言えど、あたしのことを勝手に他人へ教えないでよね！」

「はじめまして、警視庁の藤井です」
「うっわ、綺麗な婦警さん。　はじめまして甲田珠璃（こうだじゅり）です。遅れて

すいません。部活仲間との用事がなかなか終らなくて……」

珠璃は国籍日本だけど、米国生まれの白人だ。

まだ幼い頃に母親が離婚して日本人と結婚し、日本に移り住んだという。

今じゃ日本人（俺）より日本語が達者で、口げんかじゃ勝てそうにない。

髪が赤毛っぽい金髪美少女で、胸なんてロケット並みだ。

背も高いし、アメリカン・ビューティーを幼くした感じって言えばイイのだろうか？

珠璃もパイメガ婦警さんも身長の高さは同じくらい。たぶん１７０ｃｍを越えるくらいだろうか？

俺の身長が１８０ｃｍなので並ぶとちょうどいい感じだぞ。

「さっそくだけど話を聞かせてもらうわね？　わざわざ此処に来てもらったのは……」

俺へ質問した内容と同じ事を再度、今度は珠璃からも聞く婦警さん。

トーコさん珠璃と出逢う？

「亡くなった刑事さんは、ＰＫの《レイディ》ってプレイヤーを探してましたけど、それについては何か判ったスか？」
俺はいちばん気にしてたことをパイメガ婦警さんに尋ねた。

「その件は調査中です」
かーっ、なんか官僚の決まり文句みたいな答弁が返ってきた感じ。

「……と言いたいところなんですが、正直まだ何も解ってません。全てはこれからです」
「ずいぶんノンビリなんですね？　あの刑事さんが亡くなってからもう三日は経つのに」
珠璃が手厳しいことを婦警さんに言う。

「捜査は幅広く行ってます。ネットワーク上のゲームなので、ＰＫプレイヤーがゲーム内の情報をもとに現実の特定個人を狙って犯罪を起こすのは不可能と考えられてます、そのため《レイディ》というプレイヤーの情報に偏らず捜査をしているのです」
「それって、警察は《レイディ》の犯罪とは考えてないってコトっスか？」

「それは捜査上の秘密ですね。一つ言えるのは、ゲーム内のＰＫ行為と事件の因果関係がハッキリしておらず捜査の優先順位が高くなかった。というのもありますが、《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ　Ｏｎｌｉｎｅ》の存在そのものが警視庁内では認知されて無いのです」
「それじゃ《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ　Ｏｎｌｉｎｅ》で犯した犯罪は、警察に捕まらないってことですか？」

「今のままでは難しいでしょうね。亡くなった刑事が持っていたサングラスは壊れて割れているのが現場で発見されてましたし、柏木君の物を借りてもゲーム画面を見ることは出来ませんでした。第三者が検証出来ない以上、犯罪へ関わったと証明することは困難でしょう」

「ずいぶん、諦めが早くないですか？　もっと良く調べてみてもイイでしょう？」

珠璃が警察の無策に憤る。

「サングラスについては、X線検査、電波検出、元素分析、年代測定検査などを行い、何の変哲も無い普通のサングラスだと結論付けられているんです。現物が失われた以上、この状況下でサングラスがネット端末だと叫んでも理解はされないでしょうね」

「あたしとしては、それでも、もう一度調べて欲しいわけ。だってこのままじゃ、あの刑事さんが浮かばれないよ！！　TVで何て報道してるか知ってる！？」

「変なことを口走り精神分裂症だの鬱だの、刑事としての資質の問題だとか言われてたっけな」

俺も珠璃の言いたいことは判る。

TVリポーターの好き勝手なコメントは聞くに堪えないものばかりだ。

俺と違って、珠璃はあの刑事さんと1～2回しか逢ってないハズだけど、それだけの相手に対しても、理不尽な世の中の対応に憤れるとは……イイヤツだな、こいつ。

珠璃は自分の鞄をゴソゴソと漁り、何かのケースを取り出した。

「そこで、物は相談なんだけど。婦警さん、このサングラスを買わない？」

「え？　珠璃、《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ　Ｏｎｌｉｎｅ》やめちゃうの？」
サングラスを売ろうとする珠璃に俺が驚くと、
「違うわよ、友達がね、引退するからサングラス売ってお金に替えてくれ。って頼まれてたの」
「そうね……同じ物がもう一つあれば調査の幅も広がるしね。買っても良いわ」
「やった！一万で良いよ！」
「おいおい珠璃、それって元値と同じじゃん……って言うかさ、他人へサングラス渡しても使えないんじゃないか？」
「でも婦警さんだってこのサングラス必要なわけでしょ？」
「良いわよ。それで」
「わーーーい！」
「珠璃……さっきまでのイイ話の流れはどこ行った！？」
「それはそれ、これはこれよ。一万が返って来るかどうかは、切実な話なんだからね！！」

珠璃はケースからサングラスを取り出し、婦警さんに渡して一万を受け取った。
「丸くて大きなレンズだな。婦警さんが今掛けてるメガネと似てるっスね」
「ホントね。イマドキ、丸い眼鏡を掛けてるのなんて、あたしくらいだと思ってたわ」
「今は『だてめ』が流行だから、小顔に見せるために大きなフレームの娘っていっぱい居るよ。

でもプリクラで反射するのがイヤだからってレンズは外してるけどね」

「そうなの？あたしは逆で、刑事やってて隠し撮りされても大きいレンズが邪魔して顔が映らないようにって配慮もあるし、ヒトは顔の特徴を眼鏡で覚えてたりするから外すと誰だか解らなくなるって効果もあるから、ワザとこうしてるのよ」

婦警さんは自分の眼鏡を外して畳み、バッグに仕舞う。

「婦警さんってシャネラー？　バッグとその腕時計……」

左腕にデッカイ男物のような白い腕時計をはめている。文字盤がＣＨＡＮＥＬのクロノグラフだ。

「そういうワケじゃないけれど、時計にはコダワリあるかな」

高価な腕時計みたいだけど、刑事の給料ってそんなにもらえるのか！？

俺がそんな風に思っていると、

「言っとくけど、これは学生時代からやってる株で買ったのよ。誰かに貢がせたとかそういうんじゃ無いんだからねっ」

聞いてもいないことを、そんなにあせって言うとはアヤシイ……

「そのピンクの服も高そう……」

「ピンクって言われる下品な感じね、秋桜（コスモス）をイメージしてるんだけど」

はわわわわ……や・やばい、余計なヒトコトを言ってしまった。

「ばか」

珠璃がつま先で俺の足を蹴る。

うう、しまったぁ……

天太はパイメガ婦警の好意度が下がった、チクショー。

婦警さんはメガネに代わりサングラスを顔に掛ける。
「どう？似合うかしら？」

「うん、似合う似合う。カッコイイ！！」
俺はすかさず婦警さんを褒めた。
たとえ似合わなくたって同じセリフを言ったけどな！！

「天太ぁ、あんたろくすっぽ見ないで褒めてんじゃん。まったく男って……
あ、でも婦警さんホントに似合いますよ！
元が似たデザインの丸いメガネだったからそのサングラスでも違和感無いし」

「婦警さんって近視なんでしょ？　それで見えるんスか？」
「大丈夫よ。元々それほど近視じゃないの。アレはファッションよ」
「パイメガ万歳。　素晴らしいキャラっス！どうもありがとうございました！！」

俺をジトリと睨む珠璃と婦警さん。
「あれ？いま俺、口に出してた？」
こっくりと呆れたように頷く婦警さんと、汚いモノを見るような三白眼で俺を見下す珠璃。

「たく、男ってバカばっか！」
「柏木君、そんなことバッカリ言ってるとセクハラでタイホしちゃうわよ？　それと！婦警じゃなくて、今では女性警察官って呼ぶの

よ」
うぅ、さっきまでは婦警さんって呼んでても気にしなかったのに……
珠璃はついでに思い出したとばかりに、
「そうだ！　あんたこのヒトのこと、盗撮してないでしょうね？」
うわわわ！　その話題はヤメてくれーーーっ！！
「盗撮？」
婦警さんは訝しげに珠璃に話しかける。
「そ、こいつって盗撮野郎だからさ。最初あたしと出逢った時もスカートの中覗こうとしてたの！気付いてボコってやったけどさ」
「盗撮は犯罪行為よ。被害届け出す？」
「い・い、今は心を入れ替えてマスからっ！　シャレになんねーって！」
「ホントに？　さすがのあたしも、出逢ったばかりの男子高校生から実は盗撮されてました、なんて事になるとショックだわ」
「してないっ　してないってば！！」
ホントはしたけど、してない！！
「あとで、やっぱりあたしのスカートの中を盗撮してたって判ったら、ひどいわよ？」
婦警さんが瞳を底光りさせながらそんな事を言う。
いまさら否定できる空気じゃなかった。
俺はコクコク頷く。

トーコさんの守護霊は吸血鬼？（前書き）

書き上げてると思っても、いざ投稿前にチェックすると直したい所がいくつもいくつも。
そしてここ一ヶ月忙しくてなかなかそのチェックのためにすら時間が取れてません。
でも頑張る。

トーコさんの守護霊は吸血鬼？

「それにしても」
周りをキョロキョロしている婦警さん。
「どうっスか？使えます？」

「えぇ、今度は大丈夫みたい、色んなモノが見えるのね……」
だろうなぁ、あのサングラスを掛けると周り中に変な物が見えるようになるから……
まさに世界が変わるんだよ。ビックリしないヤツなんていないよな。

この店の前を歩いてる人の流れをチラ見しただけでも……
そこを3人で歩いている女子高生のうち一人と、その後ろのＯＬの腰の辺りに浮かぶ靄。あれは水子だろう。

ベビーカーを押してる女性に憑いてるらしい暗い男からはあまり良くなさそうな印象を感じる。
試しにタグを見てみると《色情霊：猥褻男Ｌｖ３》とあった。

《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ　Ｏｎｌｉｎｅ》のこのサングラスを用いれば、ああいったタチが悪い《霊》を祓うことだって出来るんだけど……

『あなたに憑いてる悪い霊を祓わさせてください』
なんて面と向かって言った日には、コッチのほうが先に追っ払われるのは目に見えている。
頼まれでもしない限り、赤の他人に取り憑いてる《霊》なんての

は、ほっとくに限るのさ。
俺が狩るのはもっぱらその辺を単独でフラフラしてる《霊》だけだ。

俺は視線を婦警さんに戻した。
おそらく婦警さんも店内外に溢れるように居る《霊》たちを見て驚いてるのだろう。

内心では驚く顔を期待しつつ待っていると、婦警さんはなんだか妙に納得したように頷き、
「……予想通りね、借りただけじゃダメで、譲り受けると所有権が譲渡されたと認識されるのね。それで認証が通って、ＵＧＯのシステムが使えるようになるワケか」

「「え？」」
婦警さんはなんだかナゾな独り言を言ってる……どういう意味ですか？

「ううん、なんでも無いわ。　ん。なるほど、色々な霊が居るわね」
「なにその冷静な反応！？　あたしなんか初めてそのサングラス掛けた時、不気味な幽霊が山ほど居るところを見て失神しそうになったわよー」
「俺も俺も、あまりの不気味さに数日うなされたっスよ。いまでもたまに夢でうなされるし」

「それじゃ、さっそく婦警さんの守護霊を呼び出してみようよ、見てみたい！！」
「あ……」

「あ、って何だよ？珠璃」
「んっと、あー、んー？」
「どうしたの？甲田さん？」
なんだか歯切れが悪い珠璃。

「えーっと、その……友達が引退しちゃった理由だけど、その……守護霊が……ね？えへへ」
「何だよ？変な守護霊なの？このサングラスのは？」
「守護霊って、そこに立ってる男性が甲田さんの守護霊で、ここに座ってる銀の人形みたいなのが柏木君の守護霊なのよね？」

「あたり！　あたしのは《メルカルト》っての。そこのは《アリアンロッド》よ」
「珠璃が言いよどむなんて、よっぽど変な守護霊なんだな？」
「えーっと、えへへへ」
笑って誤魔化そうとする珠璃、お前ってばそんなとこばっか日本人らしくなってどうするよ。

「ま、悩んだって時間のムダってモノでしょ、呼び出してみましょうか」
「お、ィイネ～、どんなのかなー？　ドキドキっスね」
「あたしは草タイプか、飛行タイプが好きなんだけどな……」
「婦警さん、それ違うゲーム」
まぁ、似たようなモノだけど。

「えーと、あ、メニューこれね」
婦警さんはＡＲ表示されてるシステム・ウィンドウを見つけたようでそこを探ってるようだ。
右手が宙をさまよってる……けど、初心者にしては指の動きが妙

に早くね？

「ん、守護霊召還、っと」

婦警さんの指がＡＲのボタンを押したようだ。

その瞬間、何者かが婦警さんの隣に現われた。

「うぉっ！！」

俺は、婦警さんが座る椅子の隣に立ってる存在に視線を合わせて驚きの声を上げた。

なんっじゃ？　この不気味な少女は！？

この娘が婦警さんの《守護霊》？　マジか！？

珠璃はこの反応を予想していたらしく、視線を彷徨わせてコッチを見ようとしない。

その《守護霊》は……

《守護霊：カウンテス・エルジェーベトＬｖ１》

頭の上のタグにそう表示されている。

元々は美少女なんだろうけど、ちょっと直視しづらいくらい不気味だった。

なにせひび割れて薄汚い肌、真っ赤な瞳と目の周りはクマなのか？瞳の３倍くらいの巨大な黒い隈となってるのがイタい、美少女の面影は皆無だ。

髪の毛は元は金髪だったのだろうけれど、泥で汚れたようにベッタリした感じで。

服装は、ゴシック風の白？だったのだろう、もう何十年も洗濯した事がないような埃まみれで、裾は擦り切れてとてもじゃないがドレスには見えない、ただのボロキレ。

まるで、ついさっき墓場から這い出してきたゾンビですって、ま

さにそんな感じ。

こんなのが《守護霊》なの！？　夜中起きて、これがベットの隣に立ってたら怖すぎる！！

俺と珠璃が引いている中、婦警さんはこの娘のある意味スゴイ格好に全く動じていない？

いや、なにやらまたもブツブツ言っている。

「なんでまた鬼なの……」

その気持ちはよーーーーっく解る。

誰だって自分の守護霊サマには愛くるしい天使やら、１００歩譲ってコケティッシュな小悪魔系をイメージするだろうしな。

「こんにちは、もう、こんばんわかな？　貴女があたしの《守護霊》サマ？」

気を取り直したらしい、婦警さんが尋ねると、コクンと頷く不気味少女。

俺の《アリアンロッド》や、珠璃の《メルカルト》などの華美さや壮麗さがちっとも無い、ある意味ハズレ守護霊の不気味少女を前にして、この落ち着きよう。

すげぇ、婦警さんスゲーっスよ。

「この娘ってヴァンパイア？」

珠璃が尋ねる。

「吸血鬼と一言で言っても、伝承によってその姿は様々だから……白人だけどゴージャスな貴族サマって感じじゃないから西欧では無いわね？　東欧のノスフェラトゥの流れかしら？」

またコクンと頷く不気味少女。

「って事は、いかにも貴族サマなカッコした吸血鬼とか、東洋の吸血鬼なんかも探せばＵＧＯの世界に居るのかな？」
「居たら楽しそうね」
と婦警さん。

俺は《エルジェーベト》こと、吸血鬼のプロフィールとステータスを表示して眺める。
他人の《守護霊》ステータスは、その全部は見れないけど、ある程度までは閲覧出来るのだ。

げっ！？

「うわ、この子、ものすごいステータス持ってる、基本値が《メルカルト》より高いよ？」
やっぱり珠璃も見てたようだ。
「うん、俺の《アリアンロッド》よりも高……い、ってナンジャこりゃ～～！？」

種族：ヴァンパイア
種族特徴：陽光下では全ステータスに－９０％のペナルティが掛かり、さらに１分間に５ポイントのＨＰを消費し自然回復は行われません。陽光下ではなくとも昼間（６時～１８時）は全ステータスに－７５％のペナルティが掛かります。深夜（２２時～２時）は全ステータスおよび回復力は３倍となります。それ以外は全ステータスと回復力は２倍となります。

「うぁぁ、こりゃ完璧夜型の《守護霊》サマね」
「昼間の１２時間は－７５％かよ！　こりゃヒデェ。夜しか遊べないじゃん」
「社会人だし、そこは平気かな？　昼間特化型とかの方が逆に遊べなさそう」
婦警さんの物言いに、なるほど、そういうモンかと思い直す。
「貴女のこと、エルって呼んで良いかしら？　あたしの事はトーコって呼んでね」
またまたコクンの不気味少女、あらため、エル。
「無口なのね。陽気なノスエフェラトゥよりかは良いか。これから宜しく、エル」
ニッコリ微笑むトーコさん、あぁ女神サマ……
そして、コックリと返事するエル。

「あ、あの、あたしもトーコさんって呼んで良いですか？　もしくはお姉サマで！」
「それは……コホン、捜査上の関係者と個人的に親しくすることは禁じられてますから。刑事さんと呼んでくださいね」
「で、でも、あたし達は同性だし、これからは《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ　Ｏｎｌｉｎｅ》仲間だし……」
「例え同じ女性でもルールはルールですから。それにどうやらＵＧＯが捜査に関係するとは今のところ思えませんし、それならばこれ以上の情報提供は不要かと判断します」
あの何事にもドライな珠璃が珍しく粘っているが、婦警さんの氷

の微笑は揺るぎがない。
このままだと、この美人さんとこれっきりになっちまいそうだ！
それでイイのか？俺。
いーや、良くない！！

「俺はそうは思わない。アニキ……あの亡くなった刑事さんはＵＧＯが事件に関係すると言ってたし。ＰＫクランの《ビシャス・クロス》とそのクラン・リーダーの《レイディ》って人物が怪しいって行方を追ってたのを知ってますから」
くそ、柄にもなく真面目に話しちまった。

「そのＰＫクランとリーダーについては警察が調査します。あなた方はこれ以上、この件で首を突っ込まないでくださいね」
「！！　俺たち、カタキを取るまで犯人探しは続けますよ」
というか、そこまでの強い思い入れは無かったけど、パイメガ婦警改めトーコさんと今後も繋がりを持ち続けるには、今はこれで押し通すしかない。

「ハッキリ言えば迷惑なんです。素人が首を突っ込んで要らぬ刺激を犯人に与える恐れがありますし、それで追い詰められたと感じた犯人が暴走して余計な被害が生じた場合、この場合はさらなる死傷事件ですが、あなた方に責任が取れますか？」

うっ、そんな言い方は卑怯だよ……
「責任とか言われても……俺たちはただ犯人が許せないだけですよ。友人が殺されたっていうのに、警察任せで後は知らん振りなんて出来ませんから。　これがトーコさんならどうなんですか？警察に言われたら、あとはどうでもイイって割り切れるんですか？」

さりげなく、トーコさん呼ばわして食い下がる俺。
「それに、俺も珠璃もＵＧＯが連続通り魔に利用されてるなんてイヤですよ。トーコさんがダメだって言っても、俺たちだけでも犯人を捕まえるつもりですから」

俺がそう言うと、トーコさんは少し考えてから軽くため息を吐く。
「このゲームは幽霊を題材にしてるだけあって、夜の活動が多くなるし……通り魔に遭う危険もそれだけ増すんですよ？　高校生が夜に出歩くのは感心しません」

トーコさんからそう説得されても、俺と珠璃の意思は変わらない。
というか、ここで諦めちゃうとトーコさんとの接点が無くなっちまうじゃないですか！！

「ふー、判ったわよ。連絡用にあたしのケータイ教えておくわ、その代わり危険そうな場所や怪しい人には近付かない、そういう時は必ず、あたしに連絡入れること。約束出来る？」

イェィ！　天太はトーコの携番をゲットした！

トーコさんの守護霊は吸血鬼？

『クゥ～～』

なんの音？

トーコさんと珠璃は、トーコさんの守護霊（エル）を驚きの顔で見つめている。

俺も釣られてそっちを見ると、

お腹を両手で押さえながら、少しだけ頬を染めた不気味（エル）少女がそこに居た。

「お腹空いたの？」

トーコさんもさすがに《守護霊》が空腹を訴えてくる、なんて考えてなかったみたいだ。

《アリアンロッド》にはお腹が空くなんて仕様は無いぞ？

もう一度、《エル》のプロフィールを隅々まで読み返してみる。

種族：ヴァンパイア

【霊障：サクリファイス】

ヴァンパイアは一日に一度、血を捧げる必要があります。怠ると一時間毎に－１０％のステータス・ペナルティが加算されます。（ペナルティはその他も含めＭａｘ１００％）

このペナルティは血が捧げられるまで継続します。

これか！？
「うわ～、イキナリ血を捧げろって、それホントに《守護霊》なの？」
「なんだよ？珠璃、献血のことは知らなかったのか？」
「ぅ、うん。友達からは、ＵＧＯは不気味だし痛いし、としか聞いてなかったよ」

「確かにのっけから血を寄越せ、では引くわね」
トーコさんはそう言いつつ、ブラウスの上ボタンを外している。
「おほっｖ」
た・谷間じゃーーーっ

『ベシッ』

「いて！」
「どこ見てンのよ！」
いて、こら。暴力はやめろ、珠璃。

「いいわよ」
トーコさんはブラウスの襟を開いて首をさらけ出し、《エル》の反対側に首を傾ける。
うぉぉおお？　首のラインがキレイだ……

クワッ

「「うわっ！！」」
エルが可愛い口を耳まで開いたと思ったら、まさに『くわっ』と擬音が聞こえそうな勢いで、大きく口を開けた。吸血鬼というと上の犬歯だけが尖ってるイメージだったが、なんというか見えてる歯

全てが、小さなダガーの刃を並べたような感じだった。

つーか、それ変だろ！？
どう考えたって全部の歯が、それぞれ指くらいの長さでもって尖っていたらどうやって口を閉じるんだよ！？
俺が疑問を感じてる間に《エル》はトーコさんの細い首にかぶりついた。
大丈夫かよ？首が咬み切り落とされたりしないだろうな？

「んっ、ん、んっ」
トーコさんは色っぽい声を上げながら、うっすらと開けた瞳で首に喰らい付いている《エル》を流し目で見ている。
が、眼福？

どれくらい吸い続けたのか。
気付くと《エル》はトーコさんから離れ、満足げな顔をしていた。

って、ぉお？　おおおおお！？
さっきまでの不気味少女が、血を吸ったためか今は結構な美少女顔になっている。
ひび割れていた肌はみずみずしく白く輝き、血走って真っ赤だった瞳は穏やかで少し吊り目気味な碧眼に。唇はアメリカンチェリーのようにプリっとしてる。
髪の毛や、服装がまだ埃だらけ汚れだらけなのを除けば、勝気そうな瞳をした金髪白人美少女がそこに立っていた。

つーか
あのダガー歯が、どうやったらその小さい口に収まるんだよ！？
おかしいだろっ！？

「……トーコさん、この結果、はじめから判ってたの？」
珠璃がトーコさんに話しかける。
「だから刑事さんと呼んでくださいってば」
トーコさんはブラウスのボタンをきっちり上まで留めながら、まだ俺たちに堅苦しく呼ばれることを求めてくる。
吸われた？咬み付かれた？場所は見た目なんともないようだ。

だから俺はそんなの聞こえない風に、きっちり名前で呼ぶ。
「それこそ俺たちの仲じゃないですか、トーコさん。　んで、何が引っ掛かってるんだ？珠璃」
睨んだってムダですって、可愛いだけですよトーコさん。

「ふつうは、いきなりヴァンパイアに血なんか吸わせないでしょ？
あたしだったら血を寄越せ、なんて言われたら逃げちゃうと思う、いくら《守護霊》だからってね。なのにトーコさんは躊躇いも無く首をさらけ出してた、変だって感じるのはあたしだけかな？」

「……そうなの？貴女達の守護霊がイケメンだし、それなら、《エル》だってヴァンパイアの端くれだもの、血を吸えば同じようにカワユクなるのかな？って思っただけよ。それにしょせんはＡＲ表示でしかない存在でしょ？　血を吸われるとか真面目に考えるのはナンセンスでしょ」

そうかなぁ？
とりあえず、トーコさんもだいぶ変なヒトだってことは判ったよ。

「トーコさん、この後時間ありますか？　ついでだからエルのレベル上げやりましょうよ」
空気が悪化しないうちに、ここぞと俺はトーコさんをゲームに誘う。
仕事中だからって誘うのを遠慮してると、次に何時逢えるか判らないし。
「勤務中ですから、それはまた次の機会にでも」
トーコさんはにべもない。

俺は人差し指を一本、目の前で横に振る。
「後で、とか言ってるとレベル上げ出来ないよ？　トーコさん」
「そうよ、トーコさんはまだ知らないだろうけど、このＵＧＯはレベル上げに困難な理由が２つほど在るのよ」
珠璃もそう言うと、トーコさんは不思議そうな顔をする。

「ＵＧＯはとっても面白いんだけど、【霊障：バックラッシュ】って言うのがあるのよ。あれ嫌がる人が多いんだよね」
「【霊障】？」
トーコさんは当たり前だけど、初耳だろうからちゃんと説明せにゃ。

「【霊障：バックラッシュ】ってのは、俺達が持つ《守護霊》が相手のモンスターと戦った際に受けたダメージの何パーセントかが、俺達プレイヤー自身に跳ね返ってくるシステムなんですよ」
「ダメージが？」

「そうなのよ！　打撲程度の衝撃なんだけど、そりゃーーーーー痛いのよね」

「だよな、あのシステムのせいでＵＧＯ止めちゃうヒトも何人か居たし」

「そうよー、あたしの友達が止めた理由はそれなの。《守護霊》がコレだってのもあるけどさ」

珠璃は《エル》をチラと見る。

「バックラッシュで顔に痣こしらえちゃって、こんなクソゲーやってられれっかーっ！って、あたしもその気持ち判るしさぁ」

「なるほど、あたしはずっとカラテをやってるから打撲の痛みに関してはある程度慣れてるけど、痣が出来ちゃうと数日はブルー入っちゃうしね」

ほほー、トーコさんは警部補だけあって武道やってるのか。

「もう一つのレベル上げが困難な理由とは何でしょうか？」

「それはなんつっても、ＰＫの存在よ」

《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ　Ｏｎｌｉｎｅ》はリアルの世界において、ＡＲ表示された中でゲームを行う。

ここで深刻な問題が出る。

ＡＲ表示された《守護霊》を操る時、その近くには必ずプレイヤーが居るということだ。

それはつまり、プレイヤー個人が特定されてしまうコトを意味する。

それでも相手が常識の範囲内でまっとうなヒトならば、何も問題は出ない。

けれど、ザンネンながらこの世の中そうじゃないヒトも多いんだ

よね。

トーコさんと初めてのＸＸＸＸ？

「《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ　Ｏｎｌｉｎｅ》に限らないだろうけど、パーティーを組んだ方が安全に狩りを進めるには楽な道だってのは判るよね？」

俺の説明に頷くトーコさん。

「ＵＧＯでパーティーを組むためには、パーティーメンバーお互いが１キロ圏内に集まってないとダメなんだ。１キロ以上離れてるとパーティーに招待出来ないシステムになってる」

「それに《守護霊》に寄り添ってないとプレイヤーは指示を出せないしね」

俺の説明に、珠璃も補足してくれている。

「ＵＧＯはＰＫもシステム的に許されてるからさ、見知らぬ多人数が集まっちゃうと中にはよからぬヤツが居たりするんだ、んで、どうしてもＵＧＯだとプレイヤーは顔バレになっちゃうからね、個人情報を明かしたくないってヒトが大多数だからさ、結果パーティーでも人数集めしにくくて、必然、まっとうなプレイヤーはパーティーを組まずにソロ活動が多くなる」

「ＰＫ集団ってのはやっぱ他のプレイヤーを襲うような大胆なヤツラだから、顔バレなんて怖くないって割り切ってるヒトが多いらしいのね。ますますソロプレイヤーじゃＰＫ集団に対抗出来ないようになって、今じゃ高レベルプレイヤーはＰＫに占められてると言っても過言じゃないのよ」

「そんな訳でまっとうなプレイヤー達は、個人情報を晒したくない

からソロプレイで低レベルから抜け出せず。ＰＫは高レベルで徒党を組むってスタイルが定着しちゃってるんだよね」
珠璃もウンウンと頷いている。
「効率の良い狩場ってのは季節によって変わるらしいんだけど、そういう美味しい場所はＰＫ連中に独占されちゃってるし」
俺と珠璃は、ＰＫが如何に酷い連中か、半ば愚痴るようにトーコさんに話す。

話が一区切りしたところでトーコさんは帰り支度をはじめてしまう。
「それでは一通り質問は終えましたからこれで失礼します。お二人ともこの後は帰宅されるのでしょうか？遅くならないようにしてくださいね。捜査へのご協力ありがとうございました」
「「えぇ～～っ！？」」
「トーコさん、せっかくだからＵＧＯして行きましょうよ、ほら、事件は現場で起きてるとか言うでしょ？　それで何か得られるかも知れないしさ」
「そうそう、やりもしないで新しい発見なんて無いってば」

さっさと引き上げようとするトーコさんを、俺と珠璃の二人掛かりでなんだかんだと言って引き止めた。俺はトーコさんとこれっきりになるのがイヤで、なんとか今以上にお近付きになれるよう頑張っているわけだが……珠璃は何でだろう？

「トーコさん、せめて一度は《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ　Ｏｎｌｉｎｅ》を遊んでみるべきだと思うの。　そうじゃないと亡くなった刑事さんがこのゲームに何を見たのか解らないで終っちゃうでしょ？」
「……そうね、判ったわ。　それじゃ、何かお勧めの敵とか場所とかある？」

なんだろう？
どうにもトーコさんは、ここからさっさと切り上げて帰りたがっているように見える。
というより、ＵＧＯで遊ぶのが面倒だと思ってるようだ。
幽霊が不気味だから、ってことでは無いようだけど……？？

さっきから隣の不気味少女、あらため、美少女守護霊（エル）とはずっとニコヤカに会話しているのだから。
会話というか、《エル》はコクン、ふるふると声を出さずに返事をしているだけだけど。

それじゃぁと、出逢った記念にパーティーを組んで、手頃に戦える場所へ行こうとなった。
挑戦するのはインスタンス・ダンジョン。
インスタンス・ダンジョンってのは、プレイヤーがお手軽に戦えるよう、プレイヤーの目の前に任意のダンジョンを開らいて遊ぶことが出来るＵＧＯのシステム・サービスの一つだ。

そうじゃないと、長々と敵を探し続けなきゃならないし、見つけた敵が自分のレベルに丁度良いかどうかも運次第となってしまう。
ＵＧＯでは歩き回るのは結局プレイヤー生身の本人だから、長時間探し続けると疲れちまう。

自分のレベルに応じて選べるインスタンス・ダンジョンはすっごく助かるサービスなんだ。

とは言っても、インスタンス・ダンジョンはお手軽に敵と戦えるとは言え、一度中に潜れば全ての敵をクリアするまでたっぷり2時間は掛かるだろう。

それだけトーコさんと長く話して居られるってワケで、珠璃の選択はナイスだ。

俺はコッソリ珠璃に見えるよう、親指を立てＧＪと合図を送った。

俺達3人は店を出て、

「んじゃ、俺がリーダーで開くよ、Ｌｖ7ダンジョンの《迷い小路》で良いかな？」

「あたしは何でもイイよ、天太」

「お任せするわ」

俺はパーティーメニューアイコンをポップさせ、そこからメニューを辿り珠璃の守護霊（メルカルト）と、トーコさんの守護霊（エルジェーベト）を自分のパーティーに招聘する。

『ピッ』

システム・メッセージ：メルカルトＬｖ１０をパーティーに招待しました。

『ピッ』

システム・メッセージ：エルジェーベトＬｖ１をパーティーに招待しました。

直ぐに二人がパーティに加入したメッセージも流れ、これでパーティを組んだことになる。
サングラスの左上にパーティー・ステータスが表示され、《メルカルト》と《エルジェーベト》が追加表示されていることを確認して、システムメニューから『ダンジョンを開く』を選び、俺が今のレベルで開催可能となっている幾つかの候補から《迷い小路》を選んだ。

建物と建物の間、一瞬前までただの壁だった場所が、まるで空間を引き伸ばすかのように歪み、何も無かった場所に小道が出来上がる。
お手軽なインスタンス・ダンジョンの出来上がり！！っと。

ここから先、ダンジョンから出るまでサングラスを外しちゃうとログオフしたと見なされ、ダンジョンから弾き出されてしまう。
まぁ、ＡＲ表示のダンジョンだからな。現実に無いはずの小道に本当に入り込むワケじゃなし、矛盾を解消するためにはダンジョンから放り出す以外にはないワケで、これが仕様なのだろう。

見慣れてる珠璃はともかく、トーコさんはこの不思議な現象にも特に驚いた風ではなかった。
変だなぁ、俺の予想じゃ……

『な・なにコレ？　さっきまで普通だったのに大きいダンジョンがっ』
『トーコさん、これが漢のダンジョンさっ』

『そ、そうなの？　なんか怖い……あたし達、コレに飲み込まれちゃったりしない？』
『大丈夫、これは俺のダンジョンだから守ってあげるよ（☆キラッ）
むしろ飲み込んで？』

『アンッ、天太君って凄く頼もしいのね。　無事あたしを守ってくれたら、後でお礼に天太君の、飲んであげるわね（うふっ）』
『飲まれるのも良いけど、ダンジョンも探求したいな』

『まぁ、天太君ってば。　あたしのダンジョンにはまだ誰も入ったことが無いのに……イイワヨ、天太君がハジメテの相手なら。　それじゃ恥ずかしいけどダンジョン開くわね？』
『よーし、固く閉ざされた入口をこじ開けて中に入れるよっ、そして一気に奥までっ！！』

「天太ぁ、もちろん一番奥までイクんだよね？」
「あたりまえだろっ、一番奥のキツイところを何度も経験して、ソコいいっvってなるまでヤってヤってヤリまくって、らめぇ今日奥は危険なのぉって言われても、そこでイクのが漢だっ！！」

「は？　アンタなに言ってんの？ちゃんと聞いてた？　初心者のトーコさんが居るから一番奥まで行くかどうかを聞いてンだけど？」
「むしろっ、トーコさんが初心者だからこそっ、初体験は一番奥までイカないとっ」

「柏木君って……そろそろ性犯罪者のブラックリストに載せてもイイかしら？」

「……むしろ、そうしてください」

な・なんだよっ！？　二人してその目は……

トーコさんと初めてのＸＸＸＸ？

俺達三人が小道に足を踏み入れたと同時に、ＡＲ表示されているシステム・ウィンドウにメッセージが流れる。そこには《Ｙｏｕｅｎｔｅｒ　ｔｈｅ　ｉｎｓｔａｎｃｅ　ｄｕｎｇｅｏｎ》と表示されていた。

俺はそのメッセージを確かめてから、《アリアンロッド》をドール・サイズから人間サイズへと戻した。ぐんぐんぐんっ、とアリアンロッドが大きくなる。

珠璃はそれを見ると、

「お人形サイズの《アリアンロッド》って可愛いよねー、羨ましいなぁ。あたしもその《守護霊》スキル欲しい！！　どうやったらその人形サイズにするスキルが身に付くの？天太」

「へ？これって《守護霊》なら誰でも出来るんじゃないの？」

「出来ないわよー、あたしもメニューあちこち探したけど無かったもん。あんただって、あたしが使ってる《守護霊》スキルの《シースルー》は使えないんでしょ？」

「……なに？その漢心をくすぐる便利そうなスキル？」

「シースルー……？」

あ、そう言えばスキルについてはトーコさんに教えてなかったっけ？

「トーコさん、《守護霊》は成長するとスキルってのが使えるようになるんだよ。人形サイズにするスキルは《ダウンサイズ》ってヤツね」

「《シースルー》は、壁なんかを透かして見ることが出来るスキルなのよ」
珠璃も自分のスキルを説明する。
「もしかして《シースルー》って、洋服とかも透過できんのかよ！？」
「ふっふっふ。　あたしのダイヤモンド・アイからは誰も逃れられないのだ」
「知らねーよ、マジかよ！？　トーコさんのスミズミまで見れてんのかよ！！……写メく……イエ、なんでもありません」
い、いま、トーコさんから殺気を感じたヨ！
それ以上一言でもしゃべったら殺す。って目だったヨ！！
「なるほど、それじゃぁ柏木君が《シースルー》なんてモノを使えるようになった日には、女性はおちおち外を出歩けなくなるわね」
「あっはっは、だよね～、天太がそんなスキル持ってたら悪用しないわけがないもん」
「くっそー、なんで俺にそのスキルが無いんだよ」

そんなクダラナイ馬鹿話をしながらダンジョンの中を奥へと進む俺たち。
「っと、あの先が最初の2体の所だったよね？」
「ああ、たしかレベル4が2体だっけかな？　トーコさんは最初見学しててよ、さすがにレベル1の《エルジェーベト》じゃ、レベル4には勝てないからさ」
「そーそー、あたし達でパワーレベリングするから、すぐに戦えるレベルまで上がるわよー」

とたん走り出す珠璃の守護霊（メルカルト）
おっと、俺も出遅れちゃカッコ付かないぜ。続いて《アリアンロッド》を突っ込ませる。

珠璃は右側の《虚腐鬼Ｌｖ４》に狙いを定めたようだ。名前に《虚》が付くのが虚霊な。
それならば、俺は左側《虚屍鬼Ｌｖ４》に初撃を与えるべく《アリアンロッド》を動かす。

《メルカルト》が最初に右側のゴーストへ打撃を与えると、左側のゴーストも《メルカルト》へ攻撃すべく反応する。攻撃を受けた側だけじゃなく、その近くに居る敵まで反応することをゲームでは『リンク』と言う。

このままにしておくと《メルカルト》は一瞬遅れてターゲットしておいた左側の敵へ一撃を加えた。
とたん、《メルカルト》へ向かおうとしていたその敵は《アリアンロッド》へと向きなおす。

よし、上手く行った。
俺は目標を右側の敵へとターゲットを変更する。
そして《メルカルト》と殴り合いとなっている右側の敵の真後ろへと《アリアンロッド》を移動させる。左側の敵は無視だ。
《アリアンロッド》は俺の意思通り、一瞬で右側の敵の真後ろへつけると《メルカルト》と敵を挟む形でフォーメーションを取る。

敵背後を取り、そこからの攻撃は大ダメージを与えることがあるんだ。

だから複数で敵を攻撃する場合には、こういう風に敵を間に挟んで戦うのがイイんだ。

《メルカルト》と《アリアンロッド》のＬｖ１０コンビ二人掛かりで、Ｌｖ４のゴーストを殴ればあっという間に１体を葬り去る。あれ？相手は死者だから葬るってのは変かな？ま、いいか。

《アリアンロッド》が引き受けていた残るもう１体へ、今度は《メルカルト》が後ろに回り込み同じように倒してしまった。

「なかなか良いリズムで戦えたねｖ」

「まぁな。レベル差もあるし瞬殺だな」

いまの２体を戦わずに見学していた《エルジェーベト》もパーティー経験値が加算されてるハズだし、この調子でもう数体倒せばレベルアップするだろう。

「《守護霊》サマが戦って、プレイヤーは後ろから指示をするわけね」

振り向くと、見学中のトーコさんは《エルジェーベト》と並んで立っていた。

「そうだよ。俺らの代わりに戦うのが《守護霊》ですからね」

「うんうん《虚霊》たちはザコでも攻撃力がハンパ無いから、【霊障：バックラッシュ】を受けると、痛いじゃすまないからさ～」

「ふーん、そうなんだ？」

奥を見つめながら何かを考えていたトーコさんは、そう生返事をすると、

「それじゃ、次はあたしの番ね」

と言うやいなやトーコさんは駆け出して、おもむろに奥の敵へ突

っ込んで行く。

「ちょっ！？」

「うわっ、相手Ｌｖ４だよ！！　Ｌｖ１のエルじゃ勝てないってば！！」

相手はこの辺りのザコとはいえ、単純計算でエルの１６倍強いんだってば！！

驚いた俺と珠璃はトーコさんを止めるべく叫んだ。

「トーコさん、無茶よっ」

珠璃はそう叫ぶが、

トーコさんは《虚邪鬼Ｌｖ４》に近付いたと思ったその瞬間。

右下段蹴りを敵に放……ったと思った時には軸足だった左足で敵の右顔面へ廻し蹴りの２段蹴りを入れてた。右そして左の、目にも留まらぬ空中での２段蹴りを綺麗に決めてしまった。

《虚邪鬼Ｌｖ４》はそのコンボ技で頭部が吹き飛び、続いてポリゴンが爆散する。

「んなアホな……」

守護霊を戦わせようとせず、プレイヤーがまっさきに戦うなんて……こんな戦い方ってアリ？

辺りにレベルアップのエフェクト音が鳴り響き、《エルジェーベト》がＬｖ２へとレベルアップしたことが判った。

俺はすかさず、おめでとう、と言うつもりだった、が、続いて聞いたことがないエフェクト音が響き渡る。驚いているとさらに、３

回目のこれまた聞いた事の無いエフェクト音が鳴り響いた。

「何だ？今のエフェクト？」

「３回鳴ったね？」

珠璃も聞いたことがないようだ、しきりと首をかしげている。

意味のある効果音ならシステム・ウィンドウに何かメッセージが出ているかも知れない。

俺はそう思って表示されている文字を読むと……

システム・メッセージ：《エルジェーベト》がレベルアップしました。

最初のエフェクト音の時のだ、これは知ってるから良い。

聞きなれた効果音で、すでに判ってることだから。

問題は次の２行。

システム・メッセージ：《エルジェーベト》がレシオアップしました。

システム・メッセージ：《エルジェーベト》がランクアップしました。

なんっじゃ、こりゃーーーーっ！？

俺の目の前で、何かトンデモ無いことが起きた。

《エルジェーベト》をターゲットして見ると、確かにネームタグにＬｖ２と書かれている。

さらに、ヒットポイントを示すＨＰステータスバーが《アリアンロッド》のバーよりも少し長い、それだけじゃなく、ＨＰバーそのものが時折キラキラと輝いている。

ＨＰバーが長いのはランクがノーマル級より高いエリート級だということを示し、キラキラ光るのはレシオがユニーク級だということをこれ以上なく物語っていた。
つまり、先ほどまで《エルジェーベト》はＬｖ１メジャー・ノーマル級だったけど、
今ではＬｖ２ユニーク・エリート級だということだ。

なのに、それを引き起こした当の張本人であるトーコさんは、
「このあいだ観た世界選手権のロシア選手の今の技は、もっとキレが良かったわね」
とか言いながら、先ほど見せた２段蹴りをシャドウ・キックしながら戻ってくる。

あっ　いま見えそうだった！　くそー、おし～～ぃっ
じゃぁ、なくて！！

トーコさんと死者のプロポーズ？

「プレイヤー参加型？」

「えぇ、この《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ　Ｏｎｌｉｎｅ》は、守護霊サマだけに戦わせるんじゃなくて、プレイヤー自身がその戦いの最中にどのように振舞うかで、守護霊サマが強くも弱くもなるんじゃないかしら？って思ったのよ。守護霊サマだけ戦うんじゃぁ、ワザワザＡＲ表示にしてる意味ないし、それこそパソコンのディスプレイに映す既存ゲームの形式で事足りるでしょ？」

トーコさんはたった一度、俺と珠璃の戦いを見ただけでそれを見抜いたのかよ。

珠璃はトーコさんに言われたことを理解すると、不満の声を上げる。

「それって、あたしにも《霊》と戦えって言うの！？　そんなの無理よー」

「ムリに、とは言わないわ。でもゲームの幅が広がるのは確かね」

「幅が広がる、つったってさ、俺ら、トーコさんのように武道やってるわけじゃないし……」

「うーん、そうねぇ……さっき、あたしが自分の得意なカラテ技で戦ったのは見たわよね？」

「う、うん」

「そんな風にプレイヤーそれぞれが持ってる、自分だけのスキルってヤツを生かした戦い方すれば良いんじゃないかしら？　守護霊と

プレイヤー二人の総合力が強さを決めるんだと思う」
「で、でも、あたし格闘技なんてやった事ないよ？」
「それなら、甲田さんは何が得意なの？」
「得意っていうか、お菓子作り？　そんなの《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ　Ｏｎｌｉｎｅ》で何の役にも立たないよ」
「昔あたしが遊んでたネトゲじゃ、生産系で《料理スキル》ってのがあって、それで創った料理を食べると、様々なパラメータが一時的に上昇して戦闘に強くなるって仕様があったわ。甲田さんは作ったお菓子を守護霊に食べさせてみたことある？　もしかしたらＵＧＯでも出来る、カモ？」
「ええっ！？　そんな事出来るの！？　やったことないよぉ」
「でも、俺、普段からサングラス掛けてるけど、食べ物見て、何らかのステータスタグが表示されたことは無かったよ？」
「そうなの？　それじゃムリかな？」
「あ、でも、あたしは調理部ではっていうか、普段はサングラス外してるし……」
珠璃はごそごそと学生鞄の中をあさると、調理部で作ったというお菓子を取り出した。
俺は、珠璃の手の中にあるそのお菓子を覗き込むように見てみた。
すると、なにやらＡＲのタグでプロパティが表示され、色々なパラメーターが書かれている。
「おおっ！？　なんかステータス出てるぞ、それ」
「ホントだ、ちゃんとアイテムとして認識してる……あ、解った。プレイヤーが自分自身で作らないと料理をゲーム内アイテムとして

認識しないのかも。店屋物はプレイヤーが作ったわけじゃないから認識しないのね」
言いだしっぺのトーコさんは、ビックリしながらも考察を付け加えるのを忘れない。

「すっげー、でも《イチゴのミルフィーユ》って表示されてるけど、ソレに苺使ってんの？」
俺はじっくりとそのお菓子を見てみたが、苺なんて欠片も見えないゾ？
つーか、このお菓子ってミルフィーユって名前で合ってんのか！？

「う・うん、ホントはもっと多くのイチゴを使わないとダメなんだけど、お値段が高いからさぁ。練習で作ったこれには少ししかスポンジの中に挟まってないんだよ……でも、見えない苺まで認識するなんて、どういう原理なの？」
「幽霊が見えるサングラスで、見えないモノをどうやって認識してるのか議論しても仕方ないわよ、それよりそのステータス凄いわよ？」

《イチゴのミルフィーユ》
力＋１０
運＋２０
知覚鋭敏＋２０
体力回復＋１００
気力回復＋２００

「でもでも、守護霊って《虚霊》の一種でしょ？　サングラスの中にしか居ないバーチャルな存在なのに、リアルで作ったお菓子って

食べられるのかな？」
「ホントに食べるかどうかは解らないわね。でもサングラスは物体認識もするから、お菓子をゲーム内アイテムとして認識すれば、現実はどうあれバーチャルなアイテムとして消費出来るかも知れないわ」

「ホントに！？　やってみるー」
期待半分、自分の守護霊（メルカルト）にお菓子を差し出す珠璃。
受け取って、パクリと一口で食べる《メルカルト》

「おおっ！？」
「うわ、一口だ」
「どうやって、一口で食べたの！？」

イチゴのミルフィーユは一口サイズとはとても思えなかったが、どうやってかペロリと食べてしまったのだ。しかも、珠璃が手に持ってたハズのお菓子はいつの間にか消えてなくなっていた。
ＡＲ表示のクセにリアルのお菓子を食べれるのかよ！？
さすが守護霊サマ、パネェ。

「でも、今更だけど、そのお菓子って守護霊サマが食べても良いんだろうけど、もしかしたらプレイヤー本人が食べても効果出るのかも……」
「あ、もう一つ残りはあるよ、あたしは学校でいっぱい食べたから……どうぞ？」
そう言ってさらにもう一つ取り出す珠璃と、それを受け取るトーコさん。

「うふふ、いただきま……あ、そうか」
何かに気付いたトーコさん？　しばらくミルフィーユを眺めて、

「えいっ」
それを半分に分けたかと思うと、自分の守護霊（エルジェーベト）に半分渡した。
エルは、くわっと大きく口を開き、トーコさんの手ごとミルフィーユにかぶりついた。
「ひゃっ」
思わずもらしたのか、トーコさんが妙な声を出す。
やはりどう食べたのか解らないが一口でペロリと平らげ、さらに割ったときに少しだけクリームが付いたトーコさんの手をペロペロと舐める。
たまらず、くすぐったそうに声を上げるトーコさん。
なんか、ィィ。

「も、もうイイから」
苦笑しつつ、いまだペロペロしている自分の守護霊を止めるトーコさんは、自分もまた半分となったミルフィーユを……
「あー……んぐっ」
一口で押し込んだ……けど、半分でも大きかったらしい、モグモグして飲み込む。
少し涙目だ。
くはぁっ　やばい、なんかキてるよ、俺。

バシっ　珠璃が俺の向うずねを蹴飛ばしやがった。
「痛っ」
「何マヌケ面して見てんのよっ！！天太。　ったくもー」
「ふぅ、エルの真似して一口に挑戦して見たけど、やるんじゃなかったわ……思った通り、一切れサイズじゃなく一口サイズでも効果は同じみたいね。エルのステータスは上がってるし」

「いやぁ、ＵＧＯって凄いゲームっスね。　俺には何が出来るのかな……」
「ソレを探すのも楽しいわね」

「そうだなぁ、俺が得意なのは……っと」
「天太の場合、盗撮でしょ？」
珠璃がそんな憎まれ口を利いた時、巡回ゴーストが直ぐ其処まで歩いて来てたのに気付く。

俺と珠璃が気付いて行動しようとするより早く、トーコさんとエルは《虚屍鬼Ｌｖ５》を挟んで前後に立ち、タコ殴りを開始していた。反応はえぇ、さすが刑事さん。
と、虚屍鬼は腕を振りかぶり、エルを強打した！！
Ｌｖ５の打撃で、Ｌｖ２のエルは堪らず数メートル後ろへ弾き飛ばされる。

やべぇ！　バックラッシュが来る！？

でも、トーコさんはまるで何も無かったかのように虚屍鬼に後ろ廻し蹴り放つ。
虚屍鬼はその蹴りでエルの方へと押しやられた。

エルは……まるでトーコさんを鏡で映したかのような上段廻し蹴りを決めて、虚屍鬼を倒す。
気付けば、エルのＨＰは１割程度しか減ってない。

「うっそー！？　殴られた時にＨＰ半分くらい消し飛んでもおかしくなかったよ？」

「つーか、あの一発で沈んでも不思議じゃ無いのに、何でなんとも無いの？」
いくら何でも、エルの防御力高すぎでしょ？　Ｌｖ２だぜ？？
俺と珠璃は疑問符のオンパレードだけど、当のトーコさんは、
「ほら、もう次が来たよｖ」
そう言ってまた走り出す。
ＵＧＯを始める前からは、考えられないほどトーコさんは楽しそうだ。
奥から４体ほど敵がこっちへ歩いて来るのが見える。
「ちょっ！？　トーコさんっ　いきなり突っ込んじゃダメだって！！」
守護霊を敵にぶつけて、囲まれないよう動きながら一体ずつ倒して行くのがセオリーなのに。
トーコさんはいきなり手前の敵目掛けて、自分がまっさきに突っ込んでいく。

一番手前の敵が腕を伸ばして、トーコさんを捕まえようと飛び出して来た。
トーコさんはその敵の腕を右手で右側へ払い除けながら、左足を斜め左前へと踏み込み、左肘を敵の肩から脇腹へかけて叩き込む、右へヨロケ様とする敵にすかさず右中段蹴りを浴びせて手前の１体目を左奥へ吹き飛ばすと、

蹴った右足を前方へ踏み込むと、１体目の後ろにいた二番目の敵へ向かって左中段前蹴りを槍のように前方へと真っ直ぐ綺麗に蹴り出して、２体目をさらに後方へ蹴飛ばす。

さらに迫り来る三番目の右側へ回り込むように右足を踏み込んだ

と思ったその時には右回りで後ろを向き、左足軸足で右後ろ廻し蹴りを放っていた。

攻撃の軸がまったくブレる事が無いバネのような動きは、ＴＶで観るようなカッコだけで威力なんか全然無い見せ掛け円運動的な廻し蹴りなんかとは比較にならない、まさに長年格闘技を修行して来た者だけが為しえる無駄な動きを削ぎ落としたシンプルにしてコンパクト、破壊のための玄人な動きその物だった。

トーコさんが３体と戦ってる間に、エルが４体目と戦い始めてた。

戦いが終りパーティステータスを見ると、エルは数体倒しただけでもうＬｖ３だ。

Ｌｖ５とか喰いまくってるもんなぁ。

不思議なことに、エルの動きはトーコさんのカラテの形に似てる。

真似てるのか？　だとすれば、武術を知らない俺の《アリアンロッド》より、下手したら強さで追い抜かれてるかも知れないな……

とほほ。

トーコさんと死者のプロポーズ？

「トーコさんのカラテって凄まじい威力ですね、昔からやってたんですか？」
珠璃（じゅり）の問いに、一戦を終らせたトーコさんは、

「えぇ、子供の頃からやってたわよ」
「やっぱり！　動きがとても綺麗です。すっごく力強いし」
珠璃がトーコさんを褒めちぎる。
だけど、なぜかトーコさんは浮かない顔をして、

「力はねぇ、全然足りないのよね。ほら、こんなだし？」
力コブを見せようとしてるのだろうか？　全然もりあがってないけど。

あ、思い出した。

「力って言えば、聞きましたよ？　トーコさん」
「え？なにを？」

「トーコさんってば、以前アーエムゲーム・ハンマー？とか言うのを二刀流で振り回して大暴れしたんだって？」
「何よソレ？　知らないわよ。　って、さてはセンパイだな、柏木君にそんな話をしたのは」
トーコさんは苦笑しながら答える。

「アーエムゲーム……？？」
珠璃が首を捻っている。

「あー、うん、そんな感じ？　大学生の頃にそんなの振り回して大暴れしたもんだから、警察に入った今でも公安警察が監視のために張り付いてて、それで良く警察入れたなぁとか伝説があるって聞きましたよ」
「もしかして、アーエムゲー？　アーエムゲー・ハンマーの事？」
珠璃は思い当たる単語があったらしい。

「お？それそれ、あーえむげー。　超美人だって聞いてたから、トンカチのデッカイのを二刀流で振り回すって、なんとなくお笑いっぽい姿だなーって話を聞いて思ったんだよね」
「お笑い……確かに、ある意味笑い話よね」
やば。なんか、トーコさんから黒いオーラが出てる。
もしかして地雷踏んじゃった？

「ですよね、いくらなんでもアーエムゲー・ハンマーはないですよね～。　天太、アーエムゲー・ハンマーってのはね、ドイツの高級チューニングカーの事よ？　つまり車両を両手で振り回したって事なの、あんたカンッペキ騙されてるよ」
「ほんとよ。車を振り回すって、あたしはどこのウルトラマンだっつの」

あわわ、また余計な一言を言ってしまったよ～
「うわわ、すんません～。さっきもフルーツパーラーの外にそれっぽく背広着た男達が3人居たから、アレはてっきり公安警察のヒトなんだって思ってましたー」
トーコさんは、ハッと顔を引き締めると、

「ふーん、気付いたんだ。柏木君って目が良いのね。　でも、素人に気付かれるようじゃぁ、公安の教育不足を責める所かな？」

「「　え？　」」

「公安があたしに張り付いてるのは本当よ。その事件が発生した時、あたしはフランスに居て完璧なアリバイがあったんだけど」

「あーソレも聞いた。奥さんへのお土産を買うのに、日本の大臣と中国のお偉いさんが二人で買い物にパリの街へ出かけて、でも通訳不在だったから赤っ恥かきそうになったところへ、五ヶ国語を話す麗人がさっそうと登場した話でしょ？」

「まったく、センパイはナンの話をしたんだか？」

ん？トーコさんは……亡くなった刑事さんの話をする時、苦笑しながらも嬉しそうに話す。

……まぁ、故人に嫉妬してもしゃーないかぁ……

「ま、それで、ニッポンのお大尽サマと中国高官の二人の窮地を救ってあげたってワケ。メンツ丸潰れ直前だった中国高官からは感謝感激の嵐でね、このピアスをプレゼントしてくれたんだけど、それを公安は気に喰わないらしくて以来ずっとなの。　まぁ公安がいくら地団駄踏んでも、あたしの耳にこの赤いルビーのピアスが輝いてる限り、どんなイチャモンもヘイチャラなんだけど」

うわー、トーコさんの黒いところを見ちゃったよ。

色々とトーコさんの過去話やらを聞きながら、少しずつインスタンス・ダンジョンの敵を倒して、残るはボスだけとなった。

ん？途中はどうなったって？　ザコを倒した話を延々聞かされるのもメンドウだろ？

《迷い小路》のラスボスは《虚悪霊Ｌｖ７エリート級》だ。
エルはここまでにＬｖ４となっている。
《メルカルト》と《アリアンロッド》の二人ではギリギリ勝てる相手だけど、ここまでのエルとそしてトーコさんの活躍があれば、きっと楽勝だろう。

そして、ここまでの戦いの中で、俺には思いついた秘策があったり。

「それじゃ、チャチャっと片付けちゃおう」
トーコさんは上前方に片手コブシを突き上げて気合を入れる。

刑事として俺たちから事情聴取していた時のトーコさんは、如何にも理想的な婦警さん然としてたけど、こうしてＵＧＯを楽しんでる姿も、またィィ。
だいぶ親しくなれた気がするんだよね。俺だけかな？そう思うのは。

ラスボスの前方に《メルカルト》、左右に《エルジェーベト》とトーコさん。
そして、俺の《アリアンロッド》はと言うと……

ドール・サイズと化してボス背後へと回り込み、ボスが《アリアンロッド》に気付かない状態から、人間サイズに戻すと同時に強襲させる。
狙った通り、気付かれない状態からの背後奇襲は大ダメージをラスボスへ与えた。

よーし、パーティープレイでの技の幅が広がった！！

なんつーか、あの大ダメージを叩き出した技を見つけただけで今日は満足って感じだぜ。

そして最後の一撃。

ラストキルは《メルカルト》が持っていった。

崩れ落ち、ポリゴンが爆散するラスボス。

同時に鳴り響くエフェクト音が３つ。

え？

「あら？　レベルアップの音に、これは……」

「うわーーーい、やったやったー。《メルカルト》がエリートにランクアップしたよーーv」

珠璃がバンザイしながらぴょんぴょん跳ねてる。マジかよ！？

「おぉ？おめでとー珠璃、やったじゃん」

システム・ウィンドウを読むと確かに《メルカルト》のランクアップメッセージが出てる。

システム・メッセージ：《エルジェーベト》がレベルアップしました。

システム・メッセージ：《アリアンロッド》がレシオアップしました。

システム・メッセージ：《メルカルト》がランクアップアップしました。

ん？　んん？？

「あーっ！？　《アリアンロッド》もレシオアップしてるじゃん！すっごーい」

ホントだ（@@；；
「ぉ？　ぉぉぉぉぉぉぉっ？　ユニーク！？　すげーーーー、キタコレ俺の時代？」
なんつーか、今日は驚きと満足の連続だ。
「これぞ主人公補正。俺レジェンドの始まりだぜ～　だぜ～　だぜ～（エコー）」
「ふふ、おめでとう柏木君、甲田さん」
「お疲れ様です。トーコさんもV」
「これでトーコさんと珠璃のハートは俺にメロメロ！？　うっは、あのシリが俺のモノに！？」
「……なんていうか、アケスケなのもここまでくれば可愛いものね」
「……ただのバカですから、相手しなくてイイですよ」

『ピッ』
システム・メッセージ：スキル《スニーク・アタック》を獲得しました。対象の感知外からの奇襲攻撃が行えます。

『ピッ』
システム・メッセージ：スキル《シェイミング・ペナルティー》を獲得しました。対象の羞恥心を呼び覚ますことで精神系の状態異常を回復します。

「おっ？新スキルきたーーっ

って《シェイミング・ペナルティー》？　精神系の状態異常を回復するだってぇ？
つーか、羞恥心ってなんだよ！？　そんなの主人公のスキルじゃねーだろっっ！！！！！」
「《シェイミング・ペナルティー》羞恥刑？　いやだわ……さすが柏木君ね」
「ホント、盗撮小僧の天太らしい。いったんどんなイヤラシイ技なんだか」
ぅぅぅ、せっかく覚えたスキルが……なんてトホホな技なんだ。
おかしいだろっ！？　このパーティーは女性二人に男は俺独り。
ここからが見せ場だっつーのに、そこで羞恥刑ってどうよ？
女性陣の俺を見る目が氷点下まで下がってんゾ、どーすんだ俺？

「二人とも帰る？　あたしはセンパイが亡くなった現場を尋ねてから本庁に戻る予定だけど？」
「あ、アニキの亡くなった場所へ行くなら俺も行きます。せめてお祈りくらいはしたい」
「あ、あたしもあたしも！」
「それじゃ、ここを出て行きましょうか」
俺達はインスタンス・ダンジョンを終了し、そこから出ると歌舞伎町方面へ歩き出した。
三人共に程なく、新宿の街が異常なことに気付く。

「なにコレ！？　ヒトが誰も居ない！？」
「街の明かりが消えてる！？　大規模な停電なの！？」

新宿駅構内、その周辺にも、人っ子一人居ないし、車も走っていないのだ。
まだ宵の口なのに、見渡す限り明かり一つ点いてない街はすでに真っ暗で、俺達以外、誰一人存在してない新宿の街は、これまで無かったほど異様な静けさだった。

「これ、もしかしてクエストかも？」
珠璃が何かに気付いたように言葉にする。

「以前、ちょっとした町の小道に入り込んだ時に、やっぱりこんな風に誰も居ないし、小道沿いの家の明かりが消えてたことがあったんだ。この雰囲気その時のクエストに似てる。そいつの大掛かり版なのかも？」
「クエストならジャーナル見れば何か出てるかも？」
俺はメニューからジャーナルを開いた。

すると、いつの間にやら《ミッションクエスト：死者のプロポーズ》と言う物が受託（アクセプト）されていた。

「死者のプロポーズ？　なんだこれ？」

トーコさんセンパイと再び逢う？

「死者のプロポーズ、ってクエストがアクセプトになってる」
ＵＧＯのクエストは相変わらず、良くわからんシステムだ。
イキナリなんだぁ？

「何ソレ？　……えっと、急ぎ現場に向かい友人の魂を救済せよ、って、え？コレまさか！？」
「なるほど」

トーコさんが後ろを振り返りながらそう返答を返した。
その口調に何かを感じた俺と珠璃は、トーコさんが見てる方角へと視線を移す。
「「　なっ……！？　」」

いつの間にか黒い影がいくつもいくつも立ち上がって、俺達に向かってゆっくりと歩いて近付いて来ていた。そいつらは俺達を逃がさないかのように、周り中から湧き出すように迫ってくる。

影の一つをターゲットすると、《悪霊：黒霧Ｌｖ６》と表示される。
Ｌｖ６とは言え、これほど沢山の霊を同時に相手なんて出来っこない！！
「やべぇ、とりあえず逃げるぞ！珠璃。トーコさん！！」

「こいつ等はどうやら、あたし達を特定の場所へ誘導したいようね」
俺が珠璃やトーコさんに声を掛けて走り出そうとした矢先だった。
妙に落ち着いたトーコさんの声が響く。

「見て、アッチの方角にはこいつ等が居ないから。つまり、向こうへ逃げるように誘導されているのよ、あたし達は」
トーコさんは警察官だけあって逃走経路が誘導されていることを一目で見抜いたようだった。
さすがだなぁ。

「そして、向こうに何が有るかというと……そう、だからこそのあのクエストタイトルなのね。
それなら、ここは乗せられて行ってみましょうか」
トーコさんはもう行き場所が判ってるみたいで、方向に迷い無く歩み始める。

車が居ない道路の真ん中を歩行者天国宜しく、暗く音一つ無い新宿の街中をトーコさん、さらに俺と珠璃が寄り添って歩く。その後を、数多くの悪霊達が蠢きながらゆっくりと付いて来る。先頭に立って背筋と足をサッと伸ばして歩くトーコさんは、場違いだけどとてもカッコ良かった。

とあるビルとビルの間を曲がり、トーコさんは前方へ優しく声を掛ける。
「お待たせ、待った？」

陰の中から何者かがノッソリ歩み出てきた。
ここまで来れば、ソレが誰なのか俺にだって解る。
「ォオヲヲ〜〜〜ォオ、フ……フジ……イ……」

思わずもうクセになってる〜霊を見ればターゲットしちまう〜す

ると、その人物は……
《怨霊：親しき友人Ｌｖ１０エリート級》だと表示された。
いや、それに加えてＨＰバーがキラリと光っている。ユニーク級でもあった。

あれは……俺は思わず呻いた。
「アニキ……」
そうなのだ、あの死んでしまった刑事さんが《霊》となって現われた。

「センパイ、無念だったんですね」
トーコさんが……少しだけかすれた声で話し掛けた。
そして、何かに引っ張られるように《怨霊》へと歩み寄っていく……

それに気付いた俺は
「ダメだ！　トーコさんそっちへ行っちゃ！！」
だけど、トーコさんの歩みは止まらない。
俺も珠璃も初めて見る同レベルボスの、Ｌｖ１０ユニーク・エリート級のプレッシャーに圧倒されて、足を動かすことが出来ずにいる。

「ォォォオオオ～、フ・フジイ、一緒ニ行コウォォ」
「センパイ……」

トーコさんは、《怨霊》と化した刑事さんに近寄ると、今では濃い陰となっている彼の手を両手でそっと包み込む。
そのとたん、『ビシビシビシッ』と何かがひび割れるような不気

味な音が鳴り響き、辺りがなお一段と闇が濃くなった気がした。
いまや《怨霊》から湧き出るプレッシャーは、冷たい風となって感じられる。
凍えそうで震えが止まらない。

その暗闇がトーコさんを覆い隠すように広がっている。
この世ならざる場所へ永遠に閉じ込めるかのように。

トーコさんが《怨霊》に抱きしめられ、それはまるでこれから恋人達が永久の旅路へ出ようとする物語のワンシーンにも見えた。

「センパイ」
闇に抱かれて徐々に姿が見えなくなって行くトーコさんから聞こえる、ふるえるような声。

「センパイの無念は必ずあたしが晴らします」
しかし、次に聞こえたその声は……もう迷いは微塵も伺えなかった。
キッパリと決意を秘めた声で。
「だからしばしのお別れです。あたしと柏木君と甲田さんとで浄土へ導いてあげますね」

『リーン、リーン、リーン』
突然、辺りに鈴の音とよく通る声で読経が響き渡り、闇を引き裂いた。

「かんじ〜ざいぼ〜さつ、ぎょうじんはんにゃはらみつた〜じしょ

うけん　ご～うんかいくうどいつさいく～やく　しやりししきふい
くう　くうふいしきしきそくぜ～くう　くうそくぜ～しき
……」

あれほど濃かった闇はいつの間にか薄れ、ふつうに夜の暗さとなっていた。
そんな物をどこに持っていたのか？
銀鈴を手にお経を読むトーコさん。

お経をそらんじられるなんて、なんて多才なヒトなんだろうか。
つーか、なんでそんなに準備がいいの？　違うか、いつでも銀鈴を持ち歩いてるのかな？

ふと気付けば俺たちの金縛りも解けている。
《エルジェーベト》は何時の間に戦い出していたのか？
《怨霊（けいじさん）》の後ろへと回り込んで戦いの火蓋を切っていた。

「天太やるよ。刑事さん、この珠璃が極楽浄土へ送ってあげるっ！」
珠璃はどっかで聞いたふうなセリフを吐くと、《メルカルト》を戦わせ始めた。

「アニキ、俺はお経なんて知らないけど、成仏出来ることを祈ってるよ。ナムナム」
俺は正直まだ迷いはある。
だけど、死者が何時までもこの世に留まってちゃイケナイのは解っている。
取得したばかりの新スキル《スニーク・アタック》を《アリアンロッド》へ指示を出す。

相手はＬｖ１０ユニーク・エリート級。
対するは、
Ｌｖ１０ユニーク・ノーマルの《アリアンロッド》と、
Ｌｖ１０メジャー・エリートの《メルカルト》、それに、
Ｌｖ５ユニーク・エリートの《エルジェーベト》だ。

ほぼ戦力的には互角。
【霊障：バックラッシュ】があるゆえ、一瞬も気が抜けない戦いが続く。

けれど、トーコさんの読経が効いているのか？
それとも、《怨霊》と化してもアニキの心の中にはトーコさんを想う気持ちがあるのか？
反撃らしい反撃を受けず、俺たちは一方的にＨＰを削っていった。

あと少し！　よしっ、もう一度スキルを使って決めるぜっ！！
「アニキ、あの世から、俺とトーコさんの、ハッピーライフを、見ててくれよっ」

俺がトドメの《スニーク・アタック》を放とうとした瞬間、
「「「「「「「「　ォォォォォォォォォォォォォッ　」」」」」」」」」
昏い声が重なり、俺と珠璃、そして、《アリアンロッド》《メルカルト》《エルジェーベト》が弾き飛ばされる、俺は吹き飛ばされて道路に転がってしまった。

「天太のバカぁ、何フラグ立ててんのよぉ～っ！？」
ぐは、俺のせいなの？

ＡＲ表示には、クエスト・ジャーナルが自動的にポップしている。
なんだ？　死者のプロポーズのクエスト項目に新しい記述が増えている？？

そこには、
『晴れぬ無念は共鳴し合いより深い業を背負う。彼等が集まるその前に友人を救え！』
と、表示されていた。

周りには俺たちを囲む形で、アニキの《怨霊》の他に、新たに現われた６体の陰が蠢いている。
ＡＲのタグには、それぞれ『怨霊：七人ミサキＬｖ１５ユニーク・エリート』と書かれており、さらにその右側に『１』～『７』までの７つの数字が付加されていた。

トーコさんセンパイと再び逢う？

「レベル15ユニーク・エリート！？」

やっべ、勝てねぇよ、あれ。

攻撃で吹っ飛ばされた俺は、立ち上がりながら珠璃にアイコンタクトで『逃げるぞ！』と……

ってこっち見てねぇし。珠璃が向いてる先は

トーコさんだった。

トーコさんは攻撃を受け流したのか？　無事に立っている。

読経をあげながら合掌ポーズのまま微動だにしていない。

「トーコさん！　逃げなきゃ！！」

俺のあせった呼びかけに

「大丈夫よ。　七人ミサキなんてたいしたことない」

こんな時だというのに、不思議とトーコさんの声は落ち着いている。

どうして、たいしたことないなんて言えるのだろう？

もしかして、相手の実力を知っている？？

《怨霊（けいじさん）》の他に6体現われた陰は、一体一体がそれぞれさっきまで戦っていた《怨霊（けいじさん）》並みのプレッシャーを放っている。

そんなのが合計して7体だ。とても俺たちだけでどうにかなる相手じゃないのだけど。

「柏木君、甲田さん、良く聞いて」
どこまでも冷静なその声に、色々考えながらぐちゃぐちゃだった頭をいったんリセットして、俺はトーコさんの次の声を聞き逃さないように注意を向ける。

「この《怨霊》たちは7体が合体することで《七人ミサキ》へと変化するの。あの事件ではこれまでにセンパイを含めて7人が犠牲になっているから、このヒトたちは同じ犯人に恨みを持つ犠牲者たちという共通点を持ってる」

そうか、TVではアニキが7人目だって言ってたからな。

「彼等は合体する際に、魂性境界面……魂の自我領域の境目が緩むわ。防御スキルが働かなくなるその時を狙えば今のあたし達でも何とかなる！　あたしが合図したらセンパイに一番近いヤツから順に攻撃して合体を阻止して！！　それと、センパイはあたしに任せてちょうだい」

「魂性境界面？？　なんだか解んないけど、やったろうじゃない！」
「ったく、美女二人が戦うってのに、俺一人逃げていられるかよ」
ぅぅ、出来れば逃げだしたいのはヤマヤマ。だけど男のミエってのがあるんだよなぁ。
男はつらいぜ！

そう内心苦笑して身構えると、こちらをチラ見するトーコさんと目が合った。

くすっ

え？いま……笑った？

ぬぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ　やる気出てきた！！

６体の陰はアニキの《霊》に近付くと、一声高く呪わしい声で叫び声を上げる。

「「「「「「「　ォォォォォォォォォォォォォッ　」」」」」」」」

『ピッ』

システム・メッセージ：《怨霊：七人ミサキ　1～7》は、スキル《カンフルエント》を発動しました。

「センパイ、解き放ってあげますね」

トーコさんは両手で複雑な印を結びながら、縦横に手を振り、気合高らかに言葉を放った。

「臨」

すると今まさに合体しようとしている怨霊たちそれぞれの頭上に、

【退魔（たいま）法：九字祈祷：壱】

と合わせて７つのメッセージが表示される。

「な・なんだ！？」
俺はこんな現象を、これまで《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ　Ｏｎｌｉｎｅ》で見たことが無い。
横を見ると、どうやら珠璃も同じらしい。ぽか～んとしてる。

「兵」　【退魔法：九字祈祷：弐】
「闘」　【退魔法：九字祈祷：参】
「者」　【退魔法：九字祈祷：肆】

怨霊頭上のメッセージは、トーコさんの掛け声と手の動きに合わせて変化していく……

「皆」　【退魔法：九字祈祷：伍】
「陣」　【退魔法：九字祈祷：陸】
「裂」　【退魔法：九字祈祷：質】
「在」　【退魔法：九字祈祷：捌】
「前」　【退魔法：九字祈祷：玖】

最後にトーコさんが「ハッ」と気合を込めると、【退魔法：九字

祈祷：縛鎖】と表示され、怨霊7体全てに薄ボンヤリした何かが絡み付き、合体しようとする彼らの動きを妨げている。

「今よっ！！」

何が起きてるのか判らないけれど、俺はトーコさんの合図で《アリアンロッド》に戦いの指示を出す。狙うは指示通りアニキに一番近いヤツで《怨霊：七人ミサキ　4》だ。

《メルカルト》と《エルジェーベト》も同じ相手を攻撃し出した。

おおおっ！？

「すげぇ、減る減る」

一撃でＨＰがグングン減っていく。

俺は今殴っているヤツのＨＰが5割を切った時点で、次のターゲットを選ぶ。

そいつの頭上には《怨霊：七人ミサキ　3》と書かれている。

「次は《3番》」

それだけで珠璃は解ってくれる。

ここら辺の『次タゲ取り』は手馴れたモノで、すでに阿吽（あうん）の呼吸と言っていい。

続けて、トーコさんはさっきから手に持つ銀鈴を自分の前に掲げて、振り始める。

『リーン……』

透明な鈴の音が夜の空気を裂いて鳴る。

すると、今度は怨霊7体の頭上に

【調伏儀式：■】

のメッセージが浮かび上がり、メッセージの最後にはカーソルが点滅していた。

さらに鈴を細かく連続的に振り続けるトーコさん。

『リリリリリ……』

怨霊たちの頭上メッセージはやがて変化する。

【調伏儀式：降魔（ごうま）法：アナライズ】

鈴の音は鳴り続け、しばらくしてメッセージが変化する。

【調伏儀式：降魔（ごうま）法：カタルシス】

そして、

【調伏儀式：降魔（ごうま）法：リムーブ・カース】

と表示されたとたん、まだ倒しきれてない怨霊たち、そして、アニキの怨霊が薄れていく……

陰は急激に薄れ、やがて生前の本人たちの姿が見えてくる。

「霊脈から流れ込む呪いの源を断ちました。安らかに眠ってください、センパイ」

トーコさんが、もうすぐ消えようとしているアニキにそう別れの挨拶を送る。

「フ・ジイ……」
消え行くアニキはトーコさんに近付いて、左手を取るとその指に何かを……
トーコさんは逆らわず、アニキがするがままに任せている。

路地裏から7人の霊が完全に消えてしまった後、合掌したトーコさんの読経と玲瓏と鳴る鈴の音だけが、厳かにこの場を支配した。
俺と珠璃も読経が終るまで何も語らず、合掌しアニキと犠牲者たちの冥福を祈る。

「最後のアレ、スゴイです！！　何なんですか？　どうやったんですか？」
珠璃が興奮してトーコさんに詰め寄る、なんだか瞳がうるうるでキラキラしてるぞ。

俺はソッチも気になるけど、銀鈴の方がより気になる。それまさか？
「その銀鈴、まさかの戦闘補助アイテムですか？　俺、ＵＧＯで武器って初めて見ました」
俺もスゲースゲー連発しながら、どさまぎでトーコさんにくっつく。
あ～、ィイー匂いだ。ス～ハ～・ス～ハ～
最初から色々と違和感は在った。
だけど、ことここに至って俺にもようやく解った。

トーコさんは少なくとも、ただの素人じゃあり得ない。

同時に今のところは、聞いても答えてくれないだろうし？
まずは仲良くなってからだよな、うん。
という事で、スキンシップを図ろうとする俺の行為は正しい！！

トーコさんは俺と珠璃の勢いに仰け反りながら
「あ、あげないわよ。この鈴はお金に代えられないんだから」

変な勘違いしてるようだけど……
銀鈴を隠すように身をよじっている。

そのトーコさんの左手には、赤い大粒の光る石が付いた指輪が、
中指にはまっていた。
アレぇ？

アニキ～～っ！！
ここは薬指にはめる流れだろーーーーっ　このヘタレ！！
少しだけ、天を仰いでバチ当たりなセリフが心をよぎったけど、
しかたないよな！？

トーコさんと赤ネーム？

「この銀の鈴はね、人間国宝とまで呼ばれた方に無理くりスケジュールをあけて作っていただいた物なの。　日々のお祈りと禊それに精進潔斎を欠かさずしていらっしゃる方だから、創作物に穢れが一切なくて、ゆえに魔を祓い霊を遠ざけるのね」

「へ～～、だからプレイヤーメイドでも無いのにＵＧＯのアイテムとして認識されるんだね。なら、そのヒトに武器を作ってもらうことって出来ないかな？」

「それは無理でしょうね、とても忙しい方だから。　穢れを清めて鍛冶を行っている方は今の日本にはとても少なくなってるの、そういった方々にはあちこちからの依頼が絶えないのよね」

「やっぱ、だめ……か」

「そもそも、柏木君が刀なんて持ち歩いてたらタイホしちゃうわよ」

た、タイホ！？

『ねぇ、天太ぁ、アナタの逞しいカタナを早くあたしの鞘に収めてぇ～んｖ』

『ふふ、俺のはカタナというより、キミの官能を叩く槌さ（きらーん）』

『ぁあ～ん、槌大好きぃ～　マウントポジションでぎゅっとしちゃうぞ～ｖ』

『慌てないで、ゆっくりタイホしてくれよ』

『ぅふふ、ほぉ～ら、捕まえちゃうわよ～んｖ』

『くぉ、こんな奥まで捕まったら、もう抜け出せないｚ『ズドッ』
「ぐふぉっ」

「柏木君の脳内に棲んでるあたしは、どんだけ痴女なわけ？」
「@＊$#5＝：；！！」
正拳が……み・ぞお・ちにはぃ……った。バタン。
「考えてる事をそのまま口に出すバカは救いようがないね」
珠璃ぃ～、せめてフォローしてくれよ。

「ふーん？」
トーコさんはアニキから貰った指輪をしげしげと眺め、
そして指から指輪を抜き取り、珠璃に渡してしまった。

「ぇっ？　えっ？」
「あげる」
えー？　アニキの遺品みたいなモノじゃん、渡しちゃうの？
「もらえませんよぉー、刑事さんからのエンゲージリングでしょー？」
「いちおう言っておくと、それレッド・ダイヤモンドよ。　３カラットくらいかな？　たぶん５千万てところかしら？　ホンモノだったら、だけど」
「「　５せんまん！？　」」
あ、はもった。

「それ、センパイの遺品なんて物じゃないから、あたしには不要な物よ」
「「　え？？　」」
「で、でも、もしかしたら？　って事もあるんじゃ」
「ノンキャリアの刑事がそんな高い指輪を買えるワケ無いでしょ？」
うわ、スーパークールだよ、トーコさんってばミもフタも無い。
「プロパティよく見て、それある種の霊体で出来た品物よ、見るだけなら浮世の世界でも見えるから指を飾る分にはホンモノに近い輝きを提供してくれるだろうけど。でもそれじゃ、あたしにとっては意味が無いの」
「でも、せっかく刑事さんがトーコさんへ最後に手渡した品物なのに……」
「センパイから貰ったモノは、ちゃんとココにある。だから平気」
トーコさんは自分の胸にそっと左手をあてた。

アイテム銘：　レッドダイヤ・エンゲージリング（付喪神）
分類：　アクセサリー
属性：　神聖
魔力：　２０
効果：　スキル強化＋３

クエストが終り、いつの間にか新宿の街には喧騒が戻ってて。

俺と珠璃、そしてトーコさんは新宿駅へ向かって歩く。

「トーコさんはお経なんてどこで覚えたんですか？」

俺も珠璃ももうすぐこの楽しい時間が終ってしまうかと思うと妙に寂しい感じでイッパイだ。

それもあって、次から次へとトーコさんに質問をなげる。

「どこって、家で。あたしの実家はお寺だったの、真言宗の■山派。毎日お経を聞いてたわよ。

父が亡くなって従兄弟にお寺を継いでもらったんだけど、父のコネでこの銀鈴を手に入れることが出来たわけ、中僧正サマサマよねぇ、父は偉大だってあの時初めてオモッタわ」

「それダメでしょ……」

きっと今頃あの世で苦笑いしてるに違いない。

「それはともかく、やっぱり《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ　Ｏｎｌｉｎｅ》と事件の関連性は薄いわね。貴方達も素人が事件に首を突っ込む以前に、学生としての本分をまっとうしなさい。イイわね？

ＵＧＯをやり過ぎて遅くなるまで遊んでてはダメよ」

「え～～っ！？　だってアニキとも再会出来たのはＵＧＯのおかげでしょー？　もっとやり込まないと事件との関連なんて見えて「天太！　ＰＫだよっ！！」　え？」

珠璃が先にＰＫに気付いて警告を発した。

珠璃のひと声に、俺はとっさにサングラスの右上に映っているレーダーマップを確認する。
このマップ表示には周囲数百mの状況が映し出されてるんだ。
俺の隣にいる珠璃とトーコさんは緑色のマーカー表示され、俺と彼女たちの守護霊3体が青色のマーカーとなって表示されている。
そして……
こちらへ向かって動いてくる赤いマーカーと、そのすぐ後ろに表示されたオレンジマーカー。
青は非犯罪者の《守護霊》
緑は非犯罪者のプレイヤー
赤は犯罪者の《守護霊》
そして、オレンジは犯罪者プレイヤーであることを示している。
プレイヤー・キラー。
PKと呼ばれているゲーム内の嫌われ者達だ。
彼等はまっすぐに俺たち目掛けて走り寄って来ているのが見て取れた。
「先頭のマーカーは……湍津姫(たぎつひめ)神。うわ、またビシャス・クロスの『龍』だよ」
「その後ろも有名どころだな、《エウリュアレ》と《ハイドラ》そして《オーロラ》かよ」
俺たちに近付いて来るのは、PKクランのビシャス・クロスって

所に所属しているメンバーで、その中でもアクティブに活動してることで有名なヤツラだった。

《湍津姫神（たぎつひめ）》のプレイヤーは『龍』。
《エウリュアレ》のプレイヤーは『ドラゴン・ブレード』
《ハイドラ》は『ソニック』
《オーロラ》は『おでん』

こいつらＡＲ表示される《クラン名》の下にわざわざプレイヤーネームもＡＲ表示してるもんでＰＫされた側が広域チャットで『△△△△に殺された』と毎日のようにメッセージが流れる。

広域チャットでの《ビシャス・クロス注意報》をこまめにチェックしながら狩りする毎日で、まったく迷惑なヤツラなんだよ。

「こりゃ今から逃げても追いつかれるな。あーぁ仕方ない抵抗するだけして派手に散りますか」
「だよね、くやしいなぁ」
俺のヤケクソの特攻意見に、高レベルのＰＫ相手に勝てないのを知ってる珠璃が同意する。

「有名なの？」
「初心者のトーコさんは知らないだろうけど、こいつらめっちゃレベルが高くてさ」
「もう毎回瞬殺だよぉ、レベル差あるんだから、あたし達を襲ってもつまんないだろうに」

「きっと暇なんだろ」

「相手のレベルが映らないってふざけてるよね。　レベル差が２０以上で見えないんだっけ？」

「ああ、ＰＫは高レベルが多いからな。　あんまりレベル差があり過ぎると相手のレベルが表示されないんスすよ」

俺はトーコさんにも判るように珠璃の言葉を通訳する。

「来たわよ」

トーコさんはレーダーマップに映る相手が、肉眼でも見える位置に近付いたことを告げた

トーコさんと赤ネーム？

トーコさんが見てる場所へと目を向ければ、
人波の向こう側に遠目にも鮮やかな赤ネームのＡＲ表示タブがチラチラと見えている。
ひとり、またひとり、赤ネームとオレンジネームが次々と姿を現してくる。

レーダーを確かめると、後ろからも二人と2体が現われてる。
新たに近寄ってきてるのは《オメガ》と《リンクス》、プレイヤーの名前は知らない。

前後あわせて6人のＰＫ。
全員レベルが見えない……ということは全員がＬｖ３１以上ということだ。

先頭のオレンジ色したプレイヤーは『龍』。
ＵＧＯのＰＫｅｒの中でもっとも有名なヤツで、青ネはＫｏＳ（キル・オン・サイト：視界に入ったら殺す）だと憚らない。

いつ見てもスーツ・ネクタイ姿で、パッと見で２０代のサラリーマンのように見えるけど、目つきが鋭すぎて、まっとうな人間にはとても見えない。

その後ろに居るヤツラだって、どいつもこいつもボーズ頭で長身、がっちりした身体つきで堅気の人間には見えない。やっぱりその筋の方々なんだろうか？

『ピッ』
システム・メッセージ：犯罪者からターゲットされました。攻撃可能まで６０秒です。

俺のＡＲ表示の真ん中に大きく『６０』の文字が浮かび、カウントダウンされていく。
「タゲされちゃったよー」
同時に珠璃もタゲられたことを告げる。

ＵＧＯではＬｖ１０以下のプレイヤーは、ＰＫから即座に攻撃を受けないようシステム的な配慮が最低限とはいえ存在している。
それがこの６０秒ルール。

ＰＫが非犯罪者をターゲットしても、Ｌｖ１０以下なら６０秒間は攻撃することが出来ない。
６０秒間だけ逃げるチャンスが与えられる、なんだけど、ＰＫは高レベルなのでたった６０秒では逃げ切ることが出来ないんだよな～、これが。

カウントダウンされてる間はサングラスを外してもログオフしたとは見なされず、リンクデット状態扱いとなるため、結局守護霊が狩られてしまうのでサングラスを外しても意味は無い。。

ならば、いまここで俺と珠璃はこの６０秒のアドバンテージをムダにしちまうしかないのか？
というと、実はそうでもない。

ＰＫへ攻撃を行えば、６０秒間だけこちらが一方的に攻撃が行えるのさ。
もっともＰＫの方が圧倒的に高レベルなので、たった６０秒ではヤケ石に水なんだけどね。

だけど、
「やるぞ、珠璃」
「うい」

「待って」

「「　え？　」」
「ちょうど良い機会だから、彼らからもお話を聞いてくるわね」
そう言って、スタスタと前方にいる４人のＰＫへと歩み寄っていくトーコさん。

トーコさんは、警察手帳を見せて、
「警視庁の者です、少しお話させてもらって良いですか？」
コワモテ相手にも関わらず、平然と声を掛けてる。

さすが現役の刑事さん。
これにはＰＫたちも驚きだろう。
これから攻撃しようとした人物があろうことか刑事で、自分が職務質問される側になるとは思っても見なかったに違いない。

「婦警コスかよ、フカすなよな」

「ホンモノ？　ＡＲ表示じゃなくて？」
「うそ、マジ？」
「ありえねぇ～！！」

トーコさんは、一度コッチを振り返ると軽く目礼して、
「では、本日は捜査へのご協力ありがとうございました。気を付けてお帰りください」
別れはやけにあっけなく。
トーコさんは結局６人のＰＫ連中を引き連れ、夜の雑踏の中へ消えて行った。

俺はトーコさんが見えなくなるまでその場でアホみたいにつったってた。
「なんつーか、このやるせなさは、最愛の彼女を最低のヤロウどもに寝取られた感じ？」
「そんなの経験したこともないくせに……」
珠璃は呆れたよう口をきく、でも、さっきまで楽しく会話で盛り上がってたのは夢じゃない。
それがあっさりと断ち切られて、寂しさを感じてるのは俺だけじゃないはずだ。

「ぁーあ、それじゃ帰ろうかな？　天太はどうする？　場所変えて狩りを続ける？」
「いや帰る、東小金井までは一緒に帰ろうぜ」
珠璃は俺よりも降りる駅が数駅先だ。
電車に乗り、ドア近くの手すりを掴んでシャンと立つ珠璃は、やっぱりお嬢なんだな、と思わせる品の良さがにじみ出ている。

ボンヤリと窓の外を見てる珠璃。
俺が何を話し掛けても上の空で生返事しか返さない。

キラリ☆
指輪がすごく綺麗に輝いてて、トーコさんから貰ったそれは珠璃に良く似合ってる。
それを見て、珠璃に話さなければならないことを思い出した。
「そういえば、トーコさんってさ」

珠璃がこっちに顔を向け、いぶかしんでる。
お、この話題には反応するんだ？

「どうやって操ってたんだと思う？」
「……なんの話？」

「守護霊をさ、《エルジェーベト》を操ってたろ？」
「何かと思えば……守護霊操るのなんて難しくないでしょ」

「まぁ、そうなんだけどさ。トーコさんってお経をあげながら合掌しつつ鈴も振ってたよな」
「それが何？」

「俺、守護霊を操る方法は、手を使うのと、声で指示するやり方以外、知らないんだよ」
ようやく珠璃も俺が言いたいことに気付いたらしい。

ボンヤリしてたのがウソみたいな勢いで俺の顔を正面で見据え、
「カラテの技で戦ってた時も、守護霊へ指示らしい動き見せてなかったわよね？」

「まぁ、そうだな」

「つまり、ＵＧＯには手と声以外の操作法が存在するのと、それを知ってたトーコさんはＵＧＯに初めて触れたわけじゃ……ない、ワケ？」

「それは判らないけど」

「けど、なに？」

「トーコさんは何かを隠してる感じがする」

珠璃は少し眼を大きく見開き

「あんたってタマ～にすごく鋭いね」

タマには余計じゃ！

東小金井の駅へ着き珠璃との別れ際に、お互いにトーコさんの情報を入手した場合には隠さず共有することを約束する。

「じゃぁ、また連絡する」

「ん」

いつも週末に連絡を取り合って休みに逢うくらいの頻度だったから、来週かな？と思っていたけど、次の連絡は予想外に早かった。

俺は早朝から鳴り響く携帯に起こされることになる。

トーコさんの裏事情？（前書き）

新年明けましておめでとうございます。

トーコさんの裏事情？

「天太ぁ～っ！」
朝っぱらから携帯の音で起こしてくれやがったのは珠璃だ。
くは～ぁっ、俺にも朝起こしてくれる彼女がとうとう出来たってか！？
ふと、めざまし時計を見ると、朝の……５：３０！？
カンベンしてくれっ。

「わかったよ、わかったんだよっ！」
耳元で怒鳴んなっ

「んぁ～？　頼むから順番に話せ」
まだノーミソ起きてません。
ムスコは起きてるけどナ。

「だからぁ、見えたんだよっ！！」
「ナ、ナンダッテェ～ッ！？　うっそ、マジかよ！？」
そ・そんなことって……
まさか、彼女がアンナことになるなんて……

「……まだ何にも言って無い。フザケテないで聞いてよ！！」
「へーい、んじゃ、言ってみ？」

「夕べさ、由里が自殺する夢を見たんだよっ！！」
「じさつ～ぅ？」
ってか、ユリって誰？

「あのさ、トーコさんが言ってたでしょ？」
「トーコさんが？」

ユリとか、自殺に関係することを言ってたっけ？？
なんだかちっとも珠璃の話は要領を得ない。

「もう！なんでわっかんないかなー？　あんたも聞いてたでしょ？」
「ごめんな、思い出せねぇ……」

「たく、あんたってヒトの話をいっつも聞いてないよね！！　こないだもさ、あたしが買って来てって頼んでたコンビニの……」
「だ～～～～～っ！！　今はその話じゃ無いだろっ、夢に出てきたトーコさんの話だろっ！？」

「ほら、また聞いてない。夢に出てきたのは由里だよ、あたしの友達の」
「言い間違えたんだよ！　トモダチなら早くそう言えよ」

「少し黙って聞いててよ、いちいち話の腰折らないで」
俺かよっ！？　悪いのは。

話がアッチに飛んだり、コッチに戻ったりする珠璃の話を総合すると、昨日トーコさんにスキルについてアドバイスもらった珠璃は、日頃からサングラスを掛けたままで過すことにしたと。
で、そのまま寝た珠璃はトモダチの由里って子が、今夜自殺するのを夢に見たのだと言う。
珠璃いわく「これって予知夢なのかな？」だそうだ。

その前に、サングラス掛けたまま寝るな。

「ねぇ、天太、由里を助けるのをあんたも手伝ってよ！！」

朝起きて由里って子に電話を掛けても通じない、メールしても返事が来ない。

珠璃はこれから学校をサボってその子の家まで行くから、俺にも付き合え！と。

わかった、わかりました、と返事を返し電話をいったん切る。

内容があまりに重過ぎる。

その相手に、やめろ！って言って止めてくれれば良いけど、自殺するまで思い込んでる背景ってのがあるはずで、それを解決してヒト一人救うのは容易じゃないだろう。

俺は携帯を眺めたまま、どうするか悩んで、メモリから番号を呼び出す。

トゥルルルル、トゥルルルル……

ここは一発、トーコさんの声を聞いて癒されよう。

『はい、藤井です』

『チューッス、柏木です。トーコさんに折り入って頼みたいことがあるんスけど』

『あら、何かしら？』

『実はトーコさんに写真のモデルになって欲しくて、ヌードなんですけどダメですか？』

『まぁ、あたしの方から頼もうと思ってたの、ちょうど良かったわ

（はーと）』
『えっと、それじゃ今日の夜どうですか？』
『それじゃ黒いパンティー穿いて待ってるわね？』
『初めて逢った時のあの服も着て欲しいな』
『やん、天太ったら服を着たままだなんてヘンタイなんだから、もう』

もう！
「はい、藤井です」
はっ！？　あぶないあぶない。

「チューッス、柏木です。トーコさんに折り入って頼みたいことがあるんスけど」
「あら、何かしら？」
「実はトーコさんに写真のモデルになって欲しくて、ヌードなんですけどダメですか？」
ブチッ　ツーツーツー……

……はっ！？　やべ、つい妄想が出ちまった。
もう一度掛けなおす。

トゥルルルル、トゥルルルル……ピッ
「キミのやってる事は犯罪行為よ。出逢ったばかりの女性へ非常識な時間帯に電話を掛け破廉恥で相手の嫌がる話題を故意に行っている。この番号消去するわね」
「うわ、待って待って！　珠璃が予知夢を見たとかで、その内容を相談したかったんスよ」

「……予知夢？」
「ええ、友達が自殺する夢を見たから、一緒に助けてくれって」
「いつ？　どこで？　友達の名前は？」
「あ……そういや聞いてねぇ……」
「……ねぇ、柏木君と甲田さんってＵＧＯで知り合ったのよね？
もしかして最近の話なの？
具体的にはここ３ヶ月以内くらい？」
「え？　ぇえそうですね、２ヶ月くらい前かな？　それがどうかしたんですか？」
「プライベートなことを聞くけど、柏木君と甲田さんは付き合ってるわけじゃないの？」
ぉ？　ぉお！？
この話の流れは……アレか！？　アレなのか！？

『天太が珠璃と付き合ってないなら、あたしと付き合ってくれる？』
『もちろんだぜ』
『うれしい！　あたし天太の理想に近付けるように頑張るね』
『俺の理想は、俺専用のエロビッチだぜ？』
『あ～んっ　天太専用エロエロ婦警ビッチにチョウキョウしｔ「柏木君、聞いてる？」
「はいっ！　聞いてまス。　えと、俺と珠璃は付き合ってませんよ、珠璃は俺のことをアウトオブ眼中だから一緒に遊んでいられるんだ、

って以前言ってました……し（涙）
これはこれで、あらためて口にすると悲しいモノがあるなっ。
くそっ　目から変な汗が出やがるぜっっ！！

「それでですね、その友達を救うために今日は珠璃と逢う約束してるんですよ」
「……行ってはダメよ」

「え？」
暗い声でダメだしするトーコさん。
うそ、マジでトーコさん珠璃に嫉妬してんの！？

「大丈夫ですよ、俺、トーコさんヒトスジですからv」
「それはどうでも良くて……」

なぜか黙り込むトーコさん、嫉妬じゃなければ何だ？
予知夢の話をしたからか？

「行っちゃダメって、理由があるんですか？」
「……捜査上の秘密だし、電話で話すようなものじゃないから……そうね、甲田さんと会うその前に、どこかで会えないかしら？　目的地はどこなの？」

「え？でも珠璃に逢う前って……10時に東小金井駅で落ち合って目白へ行く予定なんスけど」
「……なら落ち合う場所を新宿駅に変更してもらえない？　何か適当に理由付けて」

「ま、まぁそれくらいなら」
「じゃ、あたしと柏木君は9時半に新宿駅南口で会いましょう。そ

れで良いかしら？」

っしゃーーっ！！

なんだかよく判んないけど、トーコさんとまた逢えるぜーーーっ

トーコさんの裏事情？

いつもならこの時間は官舎で寝てる陶子は、今日に限っては早朝から本庁で働いていた。
もう少しで朝の６時、着替えて道場を掃除していれば朝稽古にちょうど良い時間となる。

午後からＴＶタレントが一日署長するからと警備の仕事を行わなくてはならない。
そのため必要な業務は午前中にこなさなければならず、今から準備しておく必要がある。

刑事部のあたしがなんで警備の仕事をしなければならないのか。
などと思わなくもないが、上が決めたことだ。
どうせまたお偉方のミエなのだろう。
見栄えのする女性警察官をタレントの後ろに並べておけばＴＶに映えるからと。

トゥルルルル、トゥルルルル……
こんな朝早くから連絡を寄越すなんて誰かしら？
携帯を取り出すと画面には『柏木天太』とあった。

相手はヘンタイ君か。
自分の中では彼の呼称はもう固まってる。

「はい、藤井です」
「チューッス、柏木です。トーコさんに折り入って頼みたいことがあるんスけど」

夕べ出逢ったばかりで、もう頼みごと？
あつかましい態度に呆れて物も言えないけど、こういうのは嫌いじゃない。

「あら、何かしら？」
「実はトーコさんに写真のモデルになって欲しくて、ヌードなんですけどダメですか？」
ブチッ　ツーツーツー……

「バッカじゃないの！？」
何考えてんの？　あの子。

そもそも出逢いからしてあり得ない。
いきなりスカートの中を盗撮してくるってどういうの？
見えないフリしてるから黙ってただけで、アンタのやってることなんてお見通しだっつの！
あの場で鉄拳制裁した方が良かったかしら？

トゥルルルル、トゥルルルル……
懲りずにまた掛けて来た。
通話ボタンを押し、

「キミのやってる事は犯罪行為よ。出逢ったばかりの女性へ非常識な時間帯に電話を掛け破廉恥で相手の嫌がる話題を故意に行っている。この番号消去するわね」
かなり本気で頭に来てたから、電話を切り、即座にヘンタイ小僧の携番を消去しようとする。

「うわ、待って待って！　珠璃が予知夢を見たとかで、その内容を相談したかったんスよ」
予知夢？
甲田珠璃が？

夕べ出逢った甲田珠璃の容姿を思い出しながら、ヘンタイ小僧へ返答する。
頭の中では事件の目撃情報との一致点を確かめながら、自分なりの推察も含めて。

「……予知夢？」
「ええ、友達が自殺する夢を見たから、一緒に助けてくれって」

「いつ？　どこで？　友達の名前は？」
「あ……そういや聞いてねぇ……」

聞かなかったから言われなかったのか。
それとも、そんな事実は最初から無く、甲田珠璃の作り話である可能性もあるか？

彼氏彼女だと思ってたけれど、聞けばそうではなく、２ヶ月前に知り合ったばかりだと言う。
一連の事件では、不確かな目撃情報として金髪で１７０ｃｍ以上の大柄な女性、という物があった。
さらに、えてして重犯罪では顔見知りの犯行であるケースが多い。
そして、肝心なのは被害者全員が《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ

Ｏｎｌｉｎｅ》プレイヤーだったということ。
それは陶子だけが知る情報だ。

彼らがＵＧＯプレイヤーだったという証拠は何も残っていない。
ＵＧＯのサングラスが残されていたのはセンパイの時だけで、他は日記の中でＵＧＯらしき事に触れられていたケースが一件在っただけ、残り五件ではＵＧＯに関わる事実は出てない。

けれど、

何の事はない、たまたま陶子は彼ら7人全員を見知っていた、というだけだ。
この東京にＵＧＯのプレイヤーはせいぜい数百人。
入れ替わりも激しく、ここ1～2年で新規参加したメンバーまではさすがに知らないけれど。

そして、予知夢。

陶子自身は予知系のスキルを持ってないけれど、もし、予知などと言うスキルを保有しているなら、一連の連続殺人事件で考えられる殺害方法が、ひとつ存在する。

センパイや柏木君はＰＫを怪しんでいたけれど、他ならぬ陶子だけはこの事件を赤ネームが直接手を下したのでは無いことを知っている。

被害者の遺体の損傷から、現実の猛獣がやったのではなければ、ＵＧＯの《霊》《虚霊》が行う【霊障】の類だ。

【霊障：バックラッシュ】の他にも【霊障：ダメージスタン】【霊障：オーバーキル】。
これらのスキルはＭｏｂいわゆる敵性ＮＰＣのみが保有するスキルである。

《守護霊》へダメージを与えると同時に、プレイヤーへもダメージを与えるこれらのスキルは、物理的に説明できない傷であろうとも、あり得る話なのだ。

この【霊障】スキルを持つゴーストを《捕獲》して《奴霊》化しても、ヒトに使われるようになった時点でこれらのスキルを喪ってしまうのがＵＧＯの仕様だ。
だから赤ネーム《守護霊》のスキルでは、ああした傷を遺体に残せない。

イベントで現われるボス級はクランのメンバーが監視していて、低レベルなプレイヤーが不用意に近付けないよう注意を払っているけれど、ランダムにポップするボス級には対応しきれない。
予知が出来るなら、そういった監視漏れしたボスをプレイヤーにＭＰＫすることだって可能だろう。

まだ甲田珠璃がクロだという確証は全く無い、どちらかと言えば空想レベルに近い。
それでも……現時点において一番犯人に近い位置に居るのが甲田珠璃だ。
柏木から話を聞けば聞くほど、甲田珠璃が怪しく思えてくる。

目撃情報に一致する容姿、被害者とも顔見知りで、予知能力もある。

この東京におそらく数百人しかいないＵＧＯプレイヤーの中で、この条件を満たせる者が果たして何人いるだろうか？

危険だわ。

思わず、これから甲田珠璃と会うというヘンタイ小僧に警告を与えた。

けれど、下手な事も言えない。

言えば本当に甲田珠璃が犯人だった場合に、警戒感を植えつけてしまう。

それなら。

あたしは、ヘンタイ君と朝稽古の後で会う約束をして電話を切った。

トーコさんの裏事情？

道着に着替えた陶子は、朝稽古のために道場を掃除しながら自身の事件への関わり方について考えていた。

警察官となってから今までは《Ｕｎｒｅａｌ　Ｇｈｏｓｔ　Ｏｎｌｉｎｅ》のスキルを捜査の証拠集めに利用しては来なかった。現実世界で認知されていないゲームのスキルで得られた証拠は、証拠として採用されないためであるし、捜査で楽をしたいと思っているわけでも無いからだ。

それに……

まだ大学生の頃にＡＭＧハンマーを振り回した件も含めて、つつかれたくない藪も多く、その時のアリバイ工作にＵＧＯのスキルを使っていたのも事実。

それについては、そもそも自分はセイギノミカタなんて物ではなく罪の意識もカラッキシ無いが、警察官という水が性に合ってる今となってはカミングアウトするわけにも行かないのだ。

それでも相手が予知能力者なら、自分もそれなりの対応を行わないとダメかも……

さてと、朝稽古にぼちぼち人が集まってきた。

警察官（さつかん）の他に強化合宿中の学生さんもチラホラ見える。

掃除を終えると同時に思考を切り替え、稽古のために身体をほぐす。

◆◆◆

猪狩警視長が同室の伊藤巡査を連れて、その日たまたま覗きに赴いた道場で、スタイルの良い女性警察官が投げられ続けているのが目に留まった。

あれはたしか藤井警部補だったか？

キャリア警察官採用時の調査表にミスキャンバスやら、身長に占める股下が５０％超などモデルと見紛うプロフィールがズラリと並び、職を間違えたのでは？と話題になったのは記憶に新しい。

身体の線は細いし、あれではガタイの良い格闘技を得意とする男衆に混ざるのは無理だろう。

そう思いながら眺めていると、奇妙な点に気が付いた。

柔道において過去国体や社会人大会でその人在りと恐れられた猪狩警視長の目には、一方的に投げられ続けている陶子は全然疲れを見せないし、ダメージも受けてないことを見抜いた。

逆に投げる側の人間が疲弊して交代しているほどである。

格闘技の勝ち負けは実力で決まる。

猪狩警視長の持論であるが、見たところ陶子は実力的にたいした事が無いので投げられている、そこまでは良い。

だが、投げられた後の陶子の動きが人間離れしているのだ。

投げられる直前までド素人に毛が生えたような陶子は、投げられ

た瞬間、宙に居る間に姿勢を入れ替えて畳みでの受身を完璧に行っている。
どれほどの勢いで投げられても、畳みは「ポン」と気の抜けた音を響かせるのみだ。

そこに気付いた猪狩警視長は、陶子へ声を掛けていた。
「藤井、どうだ？」

もちろん陶子に嫌は無い。
「胸をお借りします、警視長」

最初の一本は様子見だ。
「柔道でやったら俺の圧勝だろう、好きに攻撃してこい。打撃技でもいいぞ」
「お言葉に甘えさせて頂きます、警視長」

猪狩警視長はお互いに礼を行い準備が出来ると、すぐに「はじめ」と開始の合図を出す。
陶子は後屈立ちの構えから足技主体で警視長を崩そうとする。

やはり、な。

警視長は、予想通り陶子の攻撃に力が足りないことをすぐに見抜く。
蹴りは両手の回し受けで簡単にさばける。
悲しいかな体重が軽すぎて技に威力が無い。

うかつに近寄れば捕まえられて投げられることを知っている陶子

は、このまま足技で距離を保ちながら攻撃を続けるつもりであることも見れば解る。

右足での中段蹴りから、引いた右足で上段へ回し蹴りへの連続蹴りにスイッチしてきた。

それも受けると、右の後ろ回し蹴りへと流れるような連続技に繋げて来る。

まるで教科書のようにバランスを保ったままの蹴りだ。

形の演武ならどこの大会に出ても良い成績を残せるだろう。

実際、今の後ろ回し蹴りなど当たれば相当の威力だ。

ま、俺には当たらんがな。

後ろ回し蹴りを強引に受け止め、背中を見せたままの陶子を捕まえるべく一歩前に出る。

！！

おっと危ない、サソリ蹴りか！？

背中から近付く俺のさらに背後から頭部を狙って、サソリの様に後へ蹴り上げてくる。

後頭部を狙うその足をウカツに手で防げば、開いた脇腹に猿臂（ひじ）が突き刺さるだろう。

やるじゃないか。

陶子の技は美しい。

それは長年の修練の賜物であるから。

体育会系の警視長は、ひたむきな自己鍛錬を行う者が好きだ。陶子はそれだけの努力をしても体格という理由で男に勝てない点がさらに良い。
努力は必要だ、たとえ女であろうとも。ただし男を上回るのはヨロシク無い。

微妙に男性上位で上から目線であるが、警視長はすっかり格闘技の教官モードで、娘のような歳の陶子の技をあえて引き出してやってるんだ、などと油断していた。

陶子は右足でこちらの関節を狙って蹴りを放ってくるが、それは左足で受け止める。
そのまま引いた右足で今度は上段回し蹴りを放ってきた。
先ほどと同じ攻め方だ。

ふむ、そろそろ攻めのバリエーションが尽きたか？
左手で軽く受け止めてやろう、そう考えたときだった。

ガッツッ
いきなり側頭部に衝撃が走った。受け止めるつもりの右の回し蹴りが当たったのだ。

ぐおっ
同時に陶子が何をしたのかも判った。
それまで陶子は背足（※1）で蹴っていたのに、この時だけ中足（※2）で蹴ったのだ。

※1）背足：足の甲を下に伸ばして、足の甲の部分で蹴る方法。

※2）中足：足の甲を上に曲げて、足裏の指の付け根で蹴る方法。足はＬ字の形となる。

くそっ、油断した。

悔やんでも時すでに遅し。

さらに腹が立つことに、陶子は自分の頭を蹴りで捉えると同時に足を止めていた。

憎たらしいことに、ワザと威力を抑えましたとアピールしているのである。

陶子の体重の軽い蹴りなぞ耐えて逆襲すれば良いだけだが、技を止められてしまってはその機会は永遠に来ない。陶子は勝ち逃げしたのだ。

「大丈夫ですか？　警視長？」

などと可愛らしくこちらを気遣うフリも忘れない。

そもそも相手もキャリアなのだ、自分が不利にならないよう幾重にも手を尽くしてくるし、この程度でこちらを本気で心配したりするほどヌルイ相手ではない。

全ては油断した自分が悪い。

まぁ、良いさ。

「一本目はしてやられたな。二本目はやはり組み技でやろうか」

自分の土俵に引っ張り込めばいかようにもやりようはある。

少々……かなりセコイやり方だが、実を取るのがキャリア本来のあり方というものだ。

やられっぱなしで終るようなヤツは警察キャリアには居ないぞ。

猪狩警視長は二本目をさすがに気合込めて陶子と相対する。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4863x/

トーコさんの騒霊な日々

2012年1月7日00時47分発行